ISSN 1346-0382

SGRAレポート No.0037

SGRAフォーラム in 北京

若者の未来と日本語

～パネルディスカッション～

Sekiguchi Global Research Association

SGRA 関口グローバル研究会

■ フォーラムの趣旨

中国で日本語学習者が急増しているが、必ずしも学習者のニーズと教育方針が一致しているとはいえないようである。本フォーラムは、日本語学習者を対象に、先輩の経験談や日本における日本語教育の現状、日系企業を含む社会のニーズを紹介し、日本語を学ぶことによって広がる未来へのビジョンを提供することを第一の目標とする。そして、そのような若者の期待に応えるためにはどのような教育が必要とされているか提案することを第二の目標とする。

■ＳＧＲＡとは

ＳＧＲＡは、世界各国から渡日し長い留学生活を経て日本の大学院から博士号を取得した研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化にたちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。ＳＧＲＡは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがＳＧＲＡの基本的な目標です。

プ ロ グ ラ ム

ＳＧＲＡフォーラム in 北京

若者の未来と日本語

～パネルディスカッション～

日　時：　２００６年１０月２１日（土）
午後２時～午後５時３０分
北京大学日本言語文学科設立 60 周年記念
「２００６北京大学日本学研究国際シンポジウム」の
特別企画として
会　場：　北京大学生命科学学院報告庁

■■■プログラム■■■

総合司会：孫 建 軍（北京大学日本言語文化学部助教授、ＳＧＲＡ研究員）

【パネルディスカッション】

進行：朴 貞 姫（北京語言大学　助教授、ＳＧＲＡ研究員）

■ 池 崎 美 代 子（ＪＲＰ専務理事、ＳＧＲＡ会員）
「ビジネス日本語とは」

■ 武 田 春 仁（富士通（中国）有限公司副董事長（兼）総経理）
「日本企業が求める人材」

■ 張 潤 北（三井化学北京事務所所長代理）
「日本文化と通訳の仕事」

■ 徐 向 東（キャストコンサルティング代表取締役、ＳＧＲＡ研究チーフ）
「『日本語』の壁を超える」

挨拶

開会挨拶（抄録）

今西　淳子

ＳＧＲＡ代表

皆様、こんにちは。今日はお休みのところ、お集まりいただきましてありがとうございます。また大変お忙しい中、参加をご快諾いただきましたパネリストの皆様、ありがとうございます。設立60周年という記念すべきシンポジウムの特別企画としてＳＧＲＡを受け入れてくださった北京大学日本言語文学科の皆様、そしてこのフォーラムの実現のために大変なご尽力をいただいている孫建軍先生に感謝申し上げます。

私はＳＧＲＡ代表の今西淳子と申します。12年前に家族で渥美国際交流奨学財団という財団法人を作りまして、日本の大学院で勉強している外国人留学生に奨学支援をしています。家族で作った、小さな民間の財団です。政府や企業も関係なく、事業を進めています。ＳＧＲＡはそこから発展した活動です。

ＳＧＲＡのＳ、Ｇ、Ｒ、Ａが何かというと、Sekiguchi Global Research Associationで、日本語では「関口グローバル研究会」といっています。研究会というとしっかりした組織になってしまいますが、むしろネットワークです。日本では割とはやっている考え方で、もっと緩やかな結びつきです。なぜ「関口」かといいますと、渥美国際交流奨学財団の事務局が東京都文京区関口という場所にあります。関口という場所からグローバルに発信していこうという意図で作った研究会です。簡単にいいますと、日本の大学で勉強した元留学生が中心となって活動している研究ネットワークがＳＧＲＡです。そこでグローバル化に立ち向かうための方針や戦略を立てるときに使う研究、問題解決の提言を行っています。また、その成果をフォーラム、レポート、ホームページなどの方法で広く社会に発信しています。

今日は中国で初めてのフォーラムですが、東京で毎年３回、夏は軽井沢という所でやっております。東京から２時間ぐらい行った所です。日本でやった活動がだんだん大きくなりまして、日韓の共同プロジェクトやフィリピンのマニラのセミナーなどに発展しています。

ＳＧＲＡの特徴は何かといいますと、まず大多数が日本の大学院で博士号を取得した非常にハイレベルな専門家であるということ、日本に長く滞在した経験のある多国籍の知日派研究者、そして文系から理系まで多分野の研究者であることです。いろいろな人が自発的に集まって一緒に協力しながらやっていくというコンセプトです。

対象とするのは、ある一定の専門分野ではありません。専門家は学会でやればいいわけですから、ＳＧＲＡでは広く社会全般を対象にして幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動をねらいとしています。世界平和と人類の幸福に寄与すること、そしてよき地球市民の実現に貢献することがＳＧＲＡの基本的な目標です。

今後とも渥美財団及びＳＧＲＡをご支援くださいますよう、どうぞよろしくお願いします。

パネルディスカッション

若者の未来と日本語

進行　朴　貞姫氏　（北京語言大学 助教授、ＳＧＲＡ研究員）
パネリスト　池崎美代子氏（ＪＲＰ専務理事、ＳＧＲＡ会員）
武田春仁氏　（富士通（中国）有限公司副董事長（兼）総経理）
張　潤北氏　（三井化学北京事務所所長代理）
徐　向東氏　（キャストコンサルティング代表取締役、ＳＧＲＡ研究チーフ）

パネリスト自己紹介

（朴）　皆さん、こんにちは。このパネルディスカッションは緊張感をなくして楽しくやろうと思っていますが、進行役を担当している私がちょっと緊張しています。今日のディスカッションを、皆さんのニーズに合ったよいディスカッションにして、「来てよかったな、これからまた行きたいな」という印象を残したいと思います。

今日のテーマは、若者の未来を日本語とどうつなげていくかということですから、最初に、パネリストの方々からそれぞれ、ご自身と日本語、日本人の方も日本語とどのように付き合ってきたのかということを中心に、自己紹介をお願いいたします。

（張）　現在、三井化学北京事務所で仕事をしております張潤北です。

私は最初は日本語を勉強するつもりは全くなかったのです。日本という国も知りませんでした。なぜ日本語を勉強したかというと、すぐ上に３歳上の兄がいまして、その兄がちょっと不良っぽい人と付き合っていました。それで母が「うちの末っ子は、兄に付いて悪いことをするのではないか」と心配して、寄宿制の学校に入れるつもりで北京の外国語学校の試験を受けさせたわけです。

試験は見事にパスしたのですが、健康診断のときに目が悪いということが分かったのです。それでふるいにかけられてしまい、合格できませんでした。母は、大学で教職員をしていたのですが、しょんぼりしていたところ、たまたま同僚の女性職員が母を見て、「どうしたの？」「実はうちの子は、健康診断で目が悪かったのでパスできなかった」「それなら早く言ってくれればいい。実はうちの妹のだんなさんは北京の高等教育局長なので、一言言ってもらえば何とかなる」と。

それで一言言っていただいて、私は見事に裏口入学で北京外国語学校に入ったわけです。ところが、そのときに英語やフランス語などホットな学科は皆、満員だったので、仕方なく日本語という全く未知のところに入ったのですが、おかげさまで、学校を卒業したときにただ一人教職員として私は学校に残れたわけです。今日は、私の実際の経験をアピールしたいと思います。

（池崎）　こんにちは。私は日本から参りました。日本語の教師を 30 年していますが、残念なことに、この会場に来てくださっているような学生さんや留学生に対する日本語教育ではなくて、「ビジネス日本語」といわれる分野ですので、対象者は外交官やビジネスマンです。ですから今日、皆さん方の

ような学生さんにどのようなお話をすればよく分かっていただけるのか少し心配しています。

私は日本語教師という立場だけではなく、ビジネスマンに日本語をお教えするビジネス日本語協会〔ＢＮＡ〕という会社を 15 年ぐらい経営しています。それと並行して、民間の力でできるいろいろなことをやってみようと、「日本語教師の社会国際貢献を」という志で始めた非営利団体ジャパン・リターン・プログラム（ＪＲＰ）という活動も行っています。

これは、日本語を勉強してくださっている世界の優秀な方々の中から毎年、作文募集をして選考させていただき、夏に毎年約 35 日間日本に招待する「日本語サミット」などを開催しているものです。この活動を 12 年間しています。そのパネリストとして、中国の学生さんも過去に７名招待していますので、若い日本語学習者と非常に親しくなる機会として嬉しく思っています。今日もそのパネリストが、ここに２人来ています。皆さんも、ＪＲＰのホームページをご覧になって是非４月から 10 月までの募集期間に応募作文を書いてくだされば、日本に招聘されるチャンスが生まれます。ＪＲＰのネットワークに参加していただくよい機会になると思います。ＪＲＰの宣伝を兼ねて自己紹介させていただきました。

（朴）　池崎先生は、昨年、北京大学と語言大学にいらっしゃいました。語言大学では今の４年１組と交流したことがあります。ＪＲＰは、毎年、各国から一人ずつ日本に呼んで、いろいろなことを教えるということで、世界各国での交流が盛んになっています。すごくいい仕事をなさっている方です。作文コンクールから始まりますが、今年も今、募集中で、締め切りはまだです。皆さん、頑張ってください。

（武田）　こんにちは。富士通の武田です。日本語といえば、私はいつもたどたどしい日本語、あるいはなまりのある日本語とよくいわれています。というのは、私の生まれは台湾です。台湾で生まれて、小学校、中学校、大学まで台湾で勉強しました。台湾といえば、中国の北京語です。私が習った北京語は皆さんとちょっと違った北京語です。皆さんはローマ字ピンインですが、私が習ったのは、中国の 60 歳以上の人たちと同じものです。

学校では北京語ですけれども、周りは皆、台湾の友達ですから、学校が終わって友達と遊ぶと大体台湾語でしゃべります。ところが、私の両親は戦前から日本で教育を受けた人でした。親としては、日本語はもうなるべく使わないということで、家の中では使わないのですけれども、親は台湾語、中国語はそんなに流暢に話せないので、片言の日本語を教えてもらったのです。ですから、私は小さいころは中国語、台湾語、日本語を余り区別しなかったのです。自然に親に向かって日本語の単語が出てくる。近所の子供たちと遊ぶと台湾語が出てくる。学校に行くと中国語が出てくる。そういう生活をずっとしていて、言葉が３つあるとは知らなかったのです。

その後、私は日本に留学に行って、日本語を本格的に学ぶことになりました。しかしながら、私が留学した目的は日本語ではなくてコンピュータです。

台湾で勉強していたときに、先生に言われました。「世の中にコンピュータというものがあって、どんどん発展する。そのうち人間がコンピュータにコントロールされる」と。私としては非常に恐ろしいことでした。私も含めて人間がコンピュータにコントロールされる、それではコンピュータとはどういうものだという好奇心が湧いて、それで日本にコンピュータの勉強に行ったのです。

私が留学生として日本に行ったときに、通常皆さんが考えるのは東京大学や早稲田大学などで、皆さんご存じですね。あそこだと台湾や中国から留学生が一杯いるから勉強にならないのではないかということで、私が選んだ学校は、日本の安倍首相の出た成蹊大学です。今は皆さんもご存じの学校だと思いますが、当時、あそこに留学生は一人もいなかったのです。私はそこに入りました。日本語の勉強はだれも教えてくれず、いきなりコンピュータの勉強でした。

では、日本語はどのようにマスターしたか。自分で話さないと生活できない。学校に行って聞いても分からない。そこで、毎日講義が終わったら、暇なときをねらって、一番かわいい女の子をつかまえて、「すみません、これ教えてください」「すみません、あれ教えてください」。学校では私は一人だけの留学生ですから、皆私の顔を知っています。朝から晩までいろいろな人に教えてもらって、それで論文まで、ちゃんと日本語で書けるようになりました。皆さんは私よりも幸せですね。ちゃんと日本語学科で先生が文法から教えてくれます。私は、一切文法を習っていないのです。これが私と日本語の出合いです。

皆さんは私よりも恵まれた環境ですから、きっと私の下手な日本語よりももっと上手になると思いますので、ぜひ頑張ってください。

（徐） 徐と申します。私は、日本語の勉強を始めたのが 16 歳、大学に入ってからです。こうやって皆さんの顔を拝見すると、自分の大学生のころを思い出します。ちょうど皆さんと同じぐらいの年齢のとき、特に大学 2 年生あたりで、ものすごく真剣に悩んでいた時期があります。大学進学の直後は人生観や世界観を形成する時期だったと思います。1980 年代は中国が思想的に非常にオープンな時代で、欧米の思想も特にここ北京大学を中心にどんどん中国の大学に入ってきました。そのころいろいろなことがありましたが、もちろん私に一番記憶に残るのは 1989 年の春や夏ごろのことです。私は大学院に受かったので、しばらく実家に戻りました。それから北京に戻ってきたときに、自分の大学に行かずに、先に北京大学に来たのです。それほど北京大学から影響を受けた時期がありました。

大学院で勉強して、そのあと大学で働いて、そして日本留学のチャンスを得て博士課程に進学したのです。普通は日本では博士号を取得すると学者になる道を歩みますが、私はあえて学者にならずに会社でビジネスをやって、今まで来ました。

先ほどの非常に真剣に思い悩んだというのは、実際、私も日本語を志向して日本語学部に入ったわけではありません。私は大学に入る前、中国の東北地方にいました。大学に入るための推薦入学があり、私の場合は日本語学部の選択肢しかなかったから日本語学部に入ったのです。上海など南の方では、経済や国際経済など、いろいろな、新しくて非常に魅力的な学部に入るという選択肢はありましたけれども、北の方の私たちの場合は日本語しか選択肢がなかったということで日本語学部に入ったのです。

しかし、本当に思い悩んだ時期がありました。人生観や世界観を形成する時期に毎日、「私はご飯を食べました」「昨日は寝ました」といった幼稚園のような言葉をゼロからスタートして勉強しなければならないのは苦痛でした。人生って一体何なのだろうといったことを知りたくてしょうがない時期ですが、毎日毎日、非常に簡単な言葉の練習をしなければならないということで、自分の選択はやはり間違いだったとずっと思っていたのです。

学生さんは多分ご存じではないと思いますが、鳩山邦夫という方が文部大臣として中国にやってきた時、私が大学院を卒業して初めてした仕事がその

通訳でした。本当にめちゃくちゃな通訳になりました。当時、北京大学に留学している日本人がいまして、日本側の通訳でした。私は初めてで経験もありませんから、私は中国側の通訳なのに、いつも短気で早口で、相手の日本側の通訳の言葉を全部奪って一気にしゃべってしまって、しかも間違いだらけの通訳だったのです。その方はどうも北京大学で初めて博士号を取った日本人らしいのですけれども、夜の宴会では、非常に素晴らしい中国語を話していました。ですから､恥ずかしくてしょうがないのです。私は４年の大学、２年の大学院を出て、大学院のころの専門は日本語ではなくて経済や社会でしたが、通訳はこんなに下手くそなのだということが分かりました。恥ずかしくて仕方がなくて、そのころになってやっと日本語を一生懸命勉強しました。

どのように勉強したか。先ほどの武田先生は非常に素晴らしいです。女の子から教えてもらうと。私は周りにそんな素晴らしい日本人の女の子はいませんでしたので、毎日ＮＨＫのラジオ放送で「わが青春」「上方漫才」など、昼１時間ぐらい聴いて、それから文藝春秋の短いエッセイを読みました。特にエッセイなど短いものを読むのが好きだったので、そこで自分の分からない言葉をメモって勉強しました。

今日はなるべく落ち着いてしゃべるように努力はしていますが、私は非常に早口なのです。実際、大学院を出たころでさえ、あがり症で、いつもどもっていて、流暢には話せませんでした。私みたいに、日本語が好きではなく、思い悩んで、しかもあがり症でうまくしゃべれなかった人間でさえ、このように話せるようになります。それでもかなり下手くそなのですけれども、皆さんも努力すれば必ずいい日本語を話せるようになると思いますので、ぜひ頑張ってください。

(朴)　最後に私の番です。皆さんそれぞれ素晴らしいご自分の出会いをお話しになりました。日本語との出会いはそれぞれ違います。私の経歴を言いますと、またびっくりするかもしれません。ちょっと恥ずかしいですけれども、私と日本語との出会いはもう 28 年前です。皆さんはそのとき生まれていなかったかもしれません。

私の日本語との出会いも、全く自分の意思ではありません。運命にさらされてか､日本語に出会って、それで今、日本語の道を歩んできましたけれども、後悔はしません。日本語に出会ったからこそ今の私があるのではないかと思います。

皆さんは、多分、文化大革命があったということを映画で見たり、歴史で勉強したりしたでしょう。その時期だったので、学校での勉強は何もなかったのです。小学校に入ったら文化大革命で、10 年が終わったら私の高校も終わって、それですぐに、77 年に偉い鄧小平氏のおかげで大学の入試が始まったのです。受験制度の回復とともに、10 年間受験しなかった人々が一斉に受験しました。

そして幸いにも選ばれたのですけれども、当時の私は日本語を知らなかったのです。こういうものがあるということさえ知らなかった。とにかく物理が好きで、当時は理工系の方が、頭がいいといわれていたので、理工系にチャレンジしようと思いました。自分の身の程を知らないというか、応募した自分の志望大学は浙江大学の電子工学でした。女のくせにという・・・。もう１つは吉林大学の力学だったのですが、結局、総合点数が足りず受からなかったのです。それで、再試験の準備をしているときに通知が来て、あなたの点数はすごく高いから延辺大学に来てくださいといわれました。それが日本語学科だったのです。迷いましたけれども、まあ、いいかなと思って入ったのですが、今考えてみると、その選択は正しかったと思います。人間は常に生まれてから死ぬまで、自分の意思で決める選択の連続だと思います。そのときの選択が正しかったから、私の人生も明るくなり始めました。

今の皆さんは幸せでしょう。当時は日本語の先生もいませんでした。１期生ですから、先生もいないし、テープレコーダーもなかった、教科書もなかったのです。それで皆、手書きで写したものを教科書として使いました。会話の先生といえば、昔、日本

人と話したことのあるおじさんたちが教えたりしました。今覚えているのは､最初から『走れメロス』『杜子春』『坊ちゃん』などの文学作品をとにかく読むことでした。他の人について読んだりして、ひたすら読むだけで解釈もないのです。そういうふうにして勉強して、社会に出て、自分がまた先生になって本を読みながら、ああ、日本語とはこういうものなのだと、少し分かるようになりました。

そういう日本語学習で、日本人と会うこともありませんでしたので、1988 年に半年の研修コースで日本に初めて行ったのですが、全然聞き取れませんでした。それも大阪だったので、大阪弁をしゃべっている隣の奥さんが、「おおきに」「いかへん」「ごみをすてちゃあかん」とか言われ、何をおっしゃっているのだろうと全く分かりませんでした。徐々に徐々に、半年位たつと耳が慣れてきました。「ああ、これが日本語だ」という感じが出てきて、そういう日本語がだんだん好きになって、最後には、好きで好きでたまらなくなったということです。

私の専門は今でも日本語です。今日のパネルディスカッションのテーマは、学習者のニーズに合わない日本語教育があるのではないかということです。つまり、私みたいな人が伝統派なのです。こういう伝統派の教育方法が正しいかどうかということも皆さんと一緒に検討すべきということです。

とにかく、私は日本語自体が好きです。こちらの方々は日本語を武器にしていろいろなほかの仕事をなさっているのですが、私は日本語そのものに楽しさを感じる、日本語がすごく楽しくて美しい言葉だから、使うたびにいいなと思うのです。日本語が好きでやるというのが、私と日本語との出会いなのです。

皆さん、勉強には年も何も関係ありません。私は大学を出て 18 年間勉強してから、自分の力が足りないと思って留学したのが 41 歳のときでした。無事に学業を終え、博士をもらって去年帰国したばかりです。

ちょっと話が長くなりましたが、私は進行役ですからちょっと特権です。すみません。

皆さん、ご清聴ありがとうございました。

■主題スピーチ（１）

「ビジネス日本語とは」

池崎　美代子氏　（ＪＲＰ専務理事、ＳＧＲＡ会員）

私に今日与えられた仕事は、「ビジネス日本語とは何か」ということをお話しすることです。中国のいろいろな大学における「ビジネス日本語」は、例えば商取引や貿易といった事例を基にしたテキストを使って、貿易に関係する単語を習うというものであるため、まだまだ皆さんには馴染みがない分野と伺いました。

「ビジネス」という言葉は、「商業上の取引」という意味だけではなくて、「重要な任務」という意味でも使われます。例えばアメリカのブッシュ大統領の演説では、イラクに軍隊を送っているのは、アメリカの兵隊がイラクで民主主義を取り戻すために「重要な任務」を果たしているのだというコンテキストで、「ビジネス」という単語を使っています。この例えは、余りいい例ではないかもしれませんが､要するに「ビジネス」という言葉は「商取引」というだけでなく「重要な任務」という意味合いで使われるということをお話したかったのです。ですから私のお話しするビジネス日本語の「ビジネス」は、その点に重きを置いて使っています。

私はビジネス日本語協会［ＢＮＡ］という学校を経営しているのですが、「重要な任務遂行のための日本語を学べるところ」であるという意味合いで名付けました。任務を遂行するには自分一人ですることができません。チームワークばかりでなく、多くの人の協力、様々な人を巻き込んでいく働きかけが必要となります。まして、自分が目指したいこと、目標に向かって進んでいくようなときには、ますます人間関係が大切な要素となり、その人間関係をどう取り結んでいくかの力が問われます。そして、その人間関係構築のための相互理解に必要なコミュニケーションとして「ビジネス日本語」が必要ですから、私たちはビジネス日本語を「相互理解を深めるための日本語」「人間関係をつむぐための日本語」と定義付けています。

人材区分		日本語能力	
		低い	高い
ビジネスセンス	低い		①
	高い	②	求められる人間像

次に、日本でどういうビジネス日本語教育が行われているか、特に「ビジネス日本語」を教える先生に求められていること、講師像は何かについてお話します。

ビジネス日本語講師を、日本語教師経験がない場合とある場合、それからビジネスセンス（経験）がない場合とある場合という人材区分からしますと、日本語の教師経験があってもビジネスセンス（経験）がない、図の①に属する方や、逆にビジネスセンス（経験）があっても日本語の先生としての経験が余りなく、日本語の教え方や日本語の教授法に慣れていないせいで、せっかくのビジネスセンス（経験）が活かされないでいる方の、図の②に属する方々が結構多いと思います。

ではビジネス日本語教師としてどういう人たちが求められるかといえば、もう皆さんお分かりのように、日本語教育の経験もちゃんとあって、しかもビジネスセンス（経験）もある人になって頂くのが

いいのではないだろうかということです。日本では今、ビジネス日本語を教えられる先生が足りません。このような要件の備わった講師に早く、沢山、参入して頂きたいことがお分かりいただけると思います。

次に生徒さんについてですが、日本の経済力に引かれて、日本市場に挑むための日本語を身に付けたいという外国人ビジネスパーソンの職業は多岐にわたっています。最近ではやはり、IT 産業に従事する人が多いようです。そういう方々の専門知識は、講師よりはるかに深く、にわか勉強では太刀打ちできないほどです。一方、日本はご存じのように少子高齢化で、子供がだんだん少なくなって労働力に困るようになるのではないかということから、手っ取り早く外国の方々に日本に来て働いていただきたい事情があり、そのために、つまり、労働力としての外国人人材に対する日本語教育というアプローチもあります。

では、皆さん方のような、「日本語で活躍する外国籍高度専門人材」についてですが、日本以外の場所で、日本語を勉強してくださっている方々が、将来日本語を活用して、日本企業や中国内の日系企業で働きたいとか、日本語でのコミュニケーショ力を活かして活躍するような場合の高度人材像は、先ほどの日本語の講師像と重なりますが、「日本語能力が高くて、ビジネスセンスもある」。この両面を備えた人材に、是非なっていただきたい、皆さんにそういう目標をたてていただきたいと思っています。

日本語で活躍する高度専門人材像、私はあえて「日本語派」高度人材と呼んでいるのですが、そのような日本語派高度人材になるためには、大学で４年間、何を勉強したらいいでしょう。

４年間にやっていただきたいことは一杯あるのですが、どうも最近の大学生は非常に忙しい。なぜか分かりませんが時間に追われているみたいなので、あれもこれもお願いするわけにはいかないとは思いますが、とにかく４年間はしっかりと日本語能力の基盤を作っていただきたい。学生が終わって社会に出たらもっと時間が足りない、もっと忙しいことに気づくと思いますから。そのときになって日本語の基盤づくりをもう一度やりなおそうなどと思っても大変です。この４年間は、できるだけ時間を作って、特に日本語専攻や副専攻の皆さんだと思いますので、文法や語彙など地道な基盤づくりをしっかりやっていただきたいと思います。

それから、皆さんには留学のチャンスがありますか。北京語言大学や北京大学で日本語を専攻していらっしゃる方には、結構留学のチャンスがあると思いますが、まず、１年でも、短期の交換留学でも、留学をお勧めしたいと思います。その目的は日本の社会事情を知るということです。

また、こちら中国ででもできることもあります。日系企業を通して日本のビジネス現場を知るということです。

今朝、シンポジウムの開会式で日本大使館の井出公使がごあいさつなさいましたが、公使も「日本のビジネスマンと交流してください」とおっしゃいました。やはり私もそう思います。日本のビジネスマンとの交流によって、日本の企業文化、業界文化を、人と交流することで肌で感じていただくということです。

そして、日本企業です。インターンという制度が今､日本国内でも非常に盛んです。日本の企業では、海外の学生さんのインターンを受け入れるという制度も整備しつつあるように聞いています。実はＪＲＰの招聘したパネリストも、ある大手の企業のインターンに参加しました。インターネットがこれだけ盛んですから、どこの企業がどんなインターンをやっているか調べてみてください。それで、自分が将来行きたいと思う企業だけでなく、多種多様

の業種に触れてみることで、日本の企業とはこんなふうに考えるのか、こんなふうに動くのかをリサーチから感じてみる機会をつくるようにしてください。ぜひ学生時代に、学生の目で、日本の企業文化、業界分野に触れていただきたいと思っています。

次に、そのような機会に、皆さんが困ることは何かというと、日本のビジネスマンとどういうふうにコミュニケーションを取るか、自分のプレゼンスをどうきちんと示すことができるかということになろうかと思います。そういうときも、やはりビジネス日本語を運用する力を持っていると、即戦力に近づけるのではと思います。

その即戦力となるためにどうすればいいか。また先ほどの４年間でやっていただきたいことと重なりますが、基礎日本語能力とコミュニケーション能力がかぎになるでしょう。

コミュニケーション能力とはどういうことかということは、後でディスカッションの中で具体的に出ると思いますので、そこでお話していきたいと思います。コミュニケーション能力と基礎日本語能力を付けて、そしてビジネスセンスを磨いていっていただきたいと思います。

先ほどから繰り返しているビジネス経験に代わるビジネスセンスということですが、ビジネスセンスとは具体的に何なのかと、多分皆さん思っていらっしゃると思いますが、会場の皆さんはビジネスセンスとは何だと思いますか。ちょっと勇気のある人、手を挙げてください。私はこう思うというのがありますか。

（フロア）　私の考えているビジネスセンスというのはこのようなものです。中国では割と政府の力が大きくて、例えば最近、中国政府は調和の取れた社会づくりを目指していると言っています。調和の取れた社会づくりのために、これからは環境保護などの面に政府が力を入れるようになるので、企業としてはそういうチャンスもあるかなということです。

つまり、国家の政府の政策を解読することだと思います。

（池崎）　政府の政策を解読することがビジネスセンス？

（フロア）　はい。中国では特にそうなのです。

（池崎）　政策を解読するというと難しそうな感じがしますけれど、今すぐにできることとか、身の回りにあるビジネスセンスについて、あなたは何か意見がありますか。

（フロア）　ちょうど私の大学は 65 年の誕生日を迎えました。それでＯＢをたくさん集めようとしています。企業として、学生のそういう活動にスポンサーとして協賛して、いろいろ有名な大学のＯＢに向けて宣伝するのもいいのではないかと思います。

（池崎）　ありがとうございました。では私から少し補足しましょう。これは一番身近な所で起きる例です。皆さん、学校でも、企業に行っても、アルバイト先でも、ちょっとお仕事でコピーを取ってくださいとか、お茶を入れてくださいとか、そういうことを頼まれることはありますね。そのような時に、もしコピーが斜めにとれていたり、薄くて読めなかったり、余白にしみが付いていたりして、きれいにコピーが取れていないとします。そういうときには、コピーはきれいにまっすぐ入っていた方が読みやすいし、美しいですし、斜めに取れていても、「はい、できました」と平気でもってくる人には困ったなと思いませんか。読む方が見やすいように、読んで気持ちがいいように、コピー１つの取り方でもちゃんと配慮ができる。そういうことをビジネスセンスというのでは、と思います。

もう１つの例ですが、急ぐためにタクシーに乗っていて、隣の車線は流れていて多くの車がさっと過

ぎて行く。なのに、こちらはなかなか進まない。隣の車線に移ろうという気配もない、つまり、車の流れを読もうとしない、状況を読まない、お客の立場にたった機転の利く運転ではない、これはタクシーの運転手さんのビジネスセンスということになるかと思います。

長くなり過ぎましたので、取りあえず私のビジネス日本語についてのお話は終わらせていただきます。ありがとうございました。

■主題スピーチ（２）

「グローバル企業が求める人材」

武田　春仁氏　（富士通（中国）有限公司副董事長（兼）総経理）

私は仕事の関係で、よく大学あるいはいろいろな企業の経営者の研究会でスピーチをさせられるのです。特に北京大学や清華大学でお話しした経験があります。そのときに感じたことは、北京大学、清華大学はさすがに中国で一流の大学です。皆、非常に聡明そうな顔、頭のよさそうな格好をしています。先ほど、あそこでずっと座っていて、もう１つ新しい発見がありました。北京大学の日本語学科は、女性が皆美人ですね。これは日本企業が求める人材像とは関係ないですが、やはり美人は就職では得ですね。

早速ですが、まずは日本企業が求める人材像についてお話します。富士通がどういう会社かを紹介させていただきます。中国では残念ながら、富士通の知名度がまだ低いので、簡単に紹介させていただきます。富士通は、フィルムやカメラの会社ではなく、世界第３位のＩＴサービスの企業で、日本の市場では第１位です。売上高は、日本円だと４兆７千

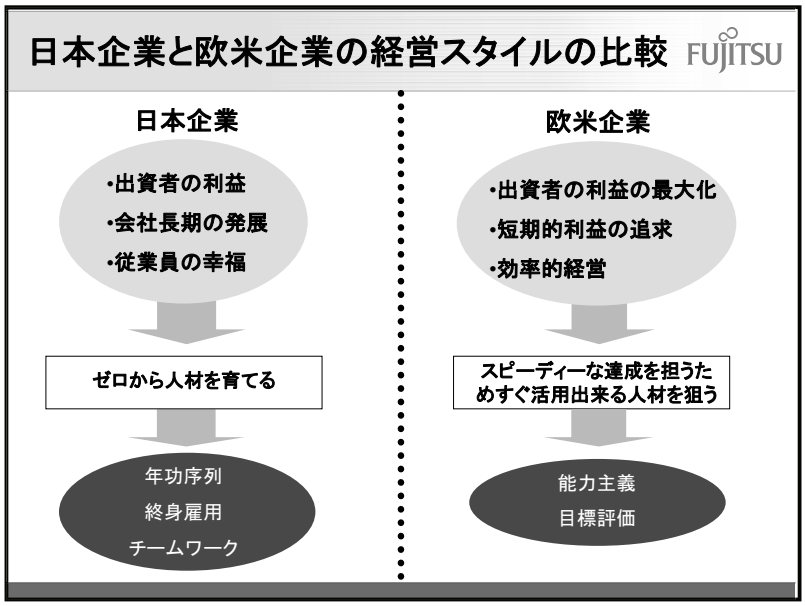

図１　日本企業と欧米企業の経営スタイルの比較

900 億円です。日本の数え方の兆は、中国だと桁が１つ違います。従業員は世界で 16 万人弱です。事業の中身は、難しい片仮名ですが、テクノロジー・ソリューション、ユビキタス・プロダクション、デバイス・ソリューション。

皆さん、ユビキタスをご存じですか。日本語は非常に便利ですね。世の中の主流の言葉は英語ですから、新しい科学技術の言葉が出ると英語です。日本語はどうするかというと、全部片仮名にしてしまう。ユビキタスも同じです。中国語はどのように翻訳するか難しい。後で簡単にご説明します。富士通の売上の中身を見ますと、テクノロジーは大体 57％で、ユビキタスは 20％です。

では、日本企業が求める人材像は何でしょうか（図１）。まず、簡単に日本企業と欧米企業の経営スタイルの違いをご説明します。「日本企業の経営目標は何ですか」とよく聞かれるのですが、私はいつも３つの目標があると言っています。１つは出資者の利益、投資してくれたのですから、そのリターンです。２つ目は、会社の長期的な発展です。そして３つ目は、企業は人で成り立つ組織体ですから、そこで働く従業員の幸せです。日本企業は採用した人を基本的にゼロから育成します。そういった経営スタイルですから、皆さんが既にご存じの言葉で、年功序列、終身雇用、そしてチームワークを重視するわけです。

一方、欧米企業にとって、企業の最大の目的は出資者の利益を最大化することです。それを達成するために短期的にどれだけの利益が出せるかという効率的な経営です。ですから、欧米企業はどういう人材が必要かというと、採用したらすぐに活用できる人です。そのために能力主義､目標化があります。これだけの売上を達成してくれれば、うんとボーナスを出しますと。これが昨今の日本企業と欧米企業の違いだと思います。

私は日本で大学に行ってコンピュータの勉強をしました。富士通に入ってから、さらに富士通で新人教育としてまたコンピュータの教育を受けました。私の同期で、隣に座って一緒に富士通のコンピュータの新人教育を受けた人は京都大学の卒業生です。京都大学で何を勉強してきたかというと、社会人類学で、コンピュータと全然関係ないのです。大学の論文は、毎日京都の動物園に行ってサルの行動を観察して書いたのです。そういう人を富士通が採用して、私と同じようにシステムエンジニアとして育成しようとしているのです。これが日本の企業の基本的な経営スタイルです。

日本は過去 10 年間、バブル経済が破綻して、非常に厳しい経済状況に入りました。そこで日本の企業は相次いで、今の日本の経営スタイルで本当にいいのか検討して、年功序列、終身雇用に関しては大分崩れてきました。富士通も含めて欧米企業の能力主義、目標化を取り入れています。ただ、完全な欧米スタイルにはまだ行っていません。日本企業の従来の経営スタイルのよさと欧米企業のよさの両方を取り入れた新しいスタイルが、今の日本企業あるいは富士通の経営スタイルであるといえます。

こういった新しい時代に向けて、特に日系企業、日本企業にとって、欧米流経営と日本流経営のスタイルの壁が既になくなりつつあるのです。日本企業はどのような人材を求めるかというと、どんどん変わっていく環境の中で日本企業も変わるのですから、必ずしも日本企業の、あるいは欧米企業のスタイルではありません。年功序列も既にある程度廃止され、目標の制度も導入されました。同じ時期で入社した人が、10 年後には、昔なら同じ給料かもしれなかったのですが、今は給料の差が出てきます。20 年たつと給料の差はもっと大きくなるケースも出てきます。通常の終身雇用である年齢まで行くと役職定年といった改革もされています。

したがって、ここで皆さんに言えるのは、日本

企業がそのように変わっていくときに、自分を磨くことが非常に重要ではないかということです。そのために何ができるのか。どこに就職していても、自分の存在価値を明確にしなければなりません。富士通あるいは富士通中国は中国の大学生を採用しています。皆さん非常に優秀です。入社したときに、いつも皆さんに言うのは、何か１つ職種をマスターすることが大切だということです。技術職で入ってくる人ならば製造の技術、あるいは設計の技術。事務で採用された人は、営業、経理、人事など、とにかく自分が従事している職種を必ずマスターしてください。日本語に「職人魂」という言葉があります。皆さんは日本の社会・文化を勉強していると思いますが、日本では、ラーメン屋一筋という、お父さんは一生ラーメン屋をやっていて、子供もずっとラーメン屋で結構繁盛しているお店があるのです。それが日本人の職務に対する一種の文化です。こういった業界の中でも、社内で「このことは、あの人」と評価されるように、自分の存在価値を明確にすることが一番大事ではないかと思います。

どこに行ってもいえることですが、他人より現在の自分が劣っているということ、他人に比べて自分のレベルが下だということは恥ではありません。ただし、去年の自分に比べて今年の自分が一向に進歩しないことは恥だと思うべきです。絶えずチャレンジの精神が必要ではないかと思います。

３つ目はコミュニケーションです。会社というのは組織です。工場であろうと､販売会社であろうと、組織は人間によって成り立つものです。したがって、この世の中に人間関係を伴わない仕事はありません。皆さんは今、日本語を勉強しています。これは１つ、よい道具です。是非とも日本と中国の文化の考え方の違いを理解して、日本人、中国人の和を大切にして、使い方、あるいは使われ方を考え、自分のパワーにすれば、将来きっといい仕事ができるのではないかと思います。

私も常に向上心を持って自分を磨くことができるかどうか分かりませんが、あえて生意気に、皆さんにこの言葉を贈ることで、私のスピーチを終わらせていただきます。ありがとうございます。

■主題スピーチ（３）

「日本文化と通訳の仕事」

張　潤北氏　（三井化学北京事務所所長代理）

さて、この中で、だれが同時通訳の一番の名人になれるでしょうか。

■ 我本将心向明月　无奈明月照沟渠

皆さんこれを日本語に訳せますか。「我は、心を名月に打ち明けようと思っても、いかんせん名月はとんでもないところを照らす」。そう日本語に訳したとしても、日本人はどこまで分かるのでしょうか。これは映画「泥棒無しの世の中」の中の台詞ですが、集団泥棒の兄貴が一匹狼の泥棒を自分の組織の中に抱き込もうとしたが、断られた時の悔しい捨て台詞です。

■ 吃葡萄不吐葡萄皮児　不吃葡萄倒吐葡萄皮児

これも難しいのです。「ぶどうを食べてぶどうの皮ははき出さずに、ぶどうを食べないのにぶどうの皮をはき出す」。これもまた、同時通訳となると難しいでしょう。日本人の方はまだ分からないでしょ

う。なかなか言葉として説明できないところがありますが、簡潔に訳すことも可能です。例えば、ぶどうの食べ方がうまいとか、悪いとか、あるいはそれに関する早口言葉というような表現です。

通訳の仕事を立派にやり遂げる基本条件は３つあると思います。１つは、原文の言語に精通していること、これは要するに相手を理解することです。もう１つは、自分の民族の言葉、母国語でどう細かい感情を表すか､それが必要です。より大事なのは、日本文化に対する理解です。つまり、人の思想あるいはコミュニケーション、心と心のふれあいを伝えることが一番大事なことです。

最近、三井化学北京事務所のある年配の職員が定年退職しました。もともと大学出で、日本語はかなり上手ですが、最後に彼女が言い残した言葉が、皆さんにとって非常に勉強になると思います。彼女はこれだけ長く日本企業に勤務していながら、日本人の心が分からない。言葉が分かっても、日本文化を知らなかったと私はそのように分析しています。今日のテーマと結び付けると、日本企業が求める人材像は、やはり日本文化の分かる人です。

【１】自然との共生

日本文化はどういう特徴があるかというと、やはり自然を大切にする、あるいは簡素さを大事にするというところです。人と自然の共生は日本文化の美的なものを作り出す原動力ではないかと思います。

【２】わび・さび

日本文化の特徴を表すものに、「わび」「さび」があると思います。この「わび」「さび」は、大学では教えていないかもしれません。先般、私はある有名な大学でこのような話をしたときに、ある学生が手を挙げて､「先生､私は知っている。『わび』『さび』とはわさびのことです」と、非常に真剣に答えたので、私は本当にがっかりしました。大学でもう４年間も勉強していながら、先生が「わび」「さび」とはどういうものなのか教えていない。要するに、日本文化の真髄を教えていない大学のプログラムは、大変問題があると思います。まして、日本企業の求めている人材像とは一体何なのか、という今日のお話は、より突っ込んだテーマだと思います。これを皆さんは知っておかなければいけません。

日本社会はやはり狭いです。中国に比べると 26 分の１ぐらいです。中国人の日本に対する評価は、「日本人が国を治めることは正に庭を治めるがごとし」。庭の手入れをするような関係だということです。これは「わび」「さび」の真髄の中にも表れています。

■ 古池や　蛙飛込む　水の音
（寂静古池塘　青蛙纵身跃入水　但闻池水声）

これは有名な松尾芭蕉の言葉です。これをどうやって中国語に訳すか。それも面白いですね。なかなか難しいですから、１つ皆さんに今日私は宿題を残しておきます。これも「わび」「さび」の心なのです。

■ 若葉して　御目の雫　ぬぐはゞや
（新绿滴翠　何当拂拭尊师泪）

この中国語訳も立派でしょう。

■ けんかして　分かった　妻の記憶力
（不吵不知道　吵架方才体会到　妻子记忆力）

中国語訳も素晴らしいです。日本の俳句にも面白いものがありますから、日本文化に対する理解が深まってくるにつれて、ますます面白さが分かるようになります。

これに対して、中国の詩人も「漢俳」(日本の俳句と同じ５７５で作った漢詩) を作ったわけです。

■ 春意何其多　骑自行车也拍拖　沿街唱恋歌

これは日本語にどう訳せばいいか。私は２つの訳を作りました。「春通り　チャリンコのデート

恋の歌」。これは感じが出ています。もう１つは「春酣　チャリンコでも付き合い　恋歌綴り」です。通訳でも翻訳でも、日本語の中に漢字があるので、どうやってその漢字を処理するかが非常に難しい。英語だと全く漢字はありませんから、勝手に想像できますけれど、日本語はやはりそうはいきません。どうしても同じ漢字を使うかという問題があります。

「わび」「さび」をどうやって理解するか。例えば日本の伊勢神宮は非常に質素なところを大事にする神社で、中国のお寺ほどぴかぴかしていません。これは、日本人の心を十分に表していると思います。

■ 桐桜　欅柿朴　庭落葉
（桐树又山樱　榉与柿朴相辉映　庭前飘落叶）
（桐樱榉柿朴　秋叶庭中落）

８つの漢字しかない俳句を中国語にどうやって訳すか。最初の訳は私の訳ですが、私がたまたまある大学でその話をした時に、学生に宿題を残したところ、２番目の訳をもらいましたが、私はとても素晴らしい訳だと思います。

ところが、それを英語に訳すとどうなるか。

The phoenix tree, the cherry, the beech,
The persimmon, the Chinese hackberry,
The fallen leaves of front of the courtyard

これは何語なのか。私はこれをアメリカの世界銀行の友達に送って見せたのですが、彼女は「これは雑な英訳だ」といいました。詩歌を訳すのは本当に難しいです。

【３】集団性

日本文化の特徴の大衆性、集団性については、桜からお話ししたいと思います。例えば日本の学者が言っているように、日本人にとって桜は素晴らしい。梅は中国の国の花ですが、たった一輪でも十分に鑑賞に堪えうる。しかし、桜を一輪とっても話にならない。ですから、桜は「万朶（ばんだ）の桜」で勝負する。皆さん、その気持ちが分かりますか。一輪の桜ではたいしたことはないのに、一斉に咲くときれい。たくさんになると、さらにきれいになります。桜が落ちるときは正に地面が花びらで覆われます。

ところが、日本人の花見の写真を見ると、だれも桜を見ていない。では、いわゆる「花見」とは何なのか。これは日本人の集団心理です。かばんを背負っている人、パンツのおじさん、飛び入り参加者、皆で楽しんでいる。これはやはり日本文化の非常に大事なところです。先ほど武田さんも池崎さんもコミュニケーションの話をされましたが、日本社会でどうしても大事にしなければならないところなのです。

祭では、みんな一心同体に神輿をかついでいる。子供も一緒です。盆踊りなどいろいろな催しを通じて、小さいときから子供の集団性を養います。少し難しくなりますけれど、大事なところです。日本文化もいろいろなものを取り囲みながら、複雑で、かつ自分で自分を説得する特徴を持っているということです。日本の国歌「君が代」で歌われているのも集団心理です。「小さな石がたくさん集まり固まって大きな巌となり、さらにその巌に苔がむすほどまで、長い長い歳月、まさしく千年も万年も永久に、大君の御代 (みよ) が栄えますように」と。

【４】ぼんやりしたものに対する追究

もう１つの日本文化の特徴として、ぼんやりした物体あるいは音声に対する一種の追求があります。

■ 夜目 遠目 傘の内

皆さんもご存じかと思いますが、これは女性の美しさです。夜、遠くから、あるいは雨の中で、傘ごしです。どうしても彼女の顔が見たくなりますけれど、残念ながら見えません。こういう感じです。これは日本文化の、何とも言えない日本の美、顔が見えないのにそれが大事なのです。

■ 豊葦原の瑞穂の国

一見、何ともピンと来ない言葉ですが、中国語に訳すと、「在那辽阔的芦苇原野、有我富饶的家乡。」といった感じです。

■ 大和撫子（やまとなでしこ）

これは中国語で「窈窕淑女」と言えば、すぐに分かりますから、似ているところがあると思います。

■ 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。

「穿过漫长的隧道、就是雪国了。月夜下的大地一片银白。」

ところで、川端康成さんがなぜノーベル賞を取ったか。英訳が余りにもうまかったのです。外国人はほとんど分からない地名などを全部略して英訳したらノーベル賞を取ったのです。もしそれをいちいち訳したらだれも分からなかった。英語訳から中国語に訳すと「火车穿过漫长的隧道、来到了雪国。夜空下大地一片银白。」となっています。日本語にはどこにも「火车」はないのです。日本語の訳はいかに難しいかということです。日本人の心を捕らえて、欧米人にも日本人の心が分かってもらうようにしなくてはならないということです。

【５】間接的で婉曲な表現

もう一つ、日本語の特徴をご紹介します。単語に対する的確な把握と、文型に対する習熟度が高いことです。同時通訳をするときに、それをいかに把握するか。あるいは話をする人の心理に対する推測、日本文化に対する深い理解が非常に大事です。

日本文化と言葉の接点、そこには非常にあいまいで婉曲な言い方が多いのです。例えば「指導していきたいと思います」「クラスで挑戦していきたいと思います」。皆さんもよく使うでしょう。ところが、私も同僚とよく酒を飲みながら話をするのですが、中国人は「私はできません」「行けません」「行けない」「やれない」といった、日本人から見ればつっけんどんな返事しか返ってこないという理解があります。日本人だと「私はできないと思いますが・・・」などいろいろな言い方があります。最後に「～と思います」と、はっきり断定しない言い方をします。ところが､そのようなあいまいな表現は、通訳にとっては非常にいいのですが、たくさん使ってもいけません。適切に使った方がいいということです。

■ 人多手杂、看好自己的包。

中国語では、「犯人がいるかどうか分からないけれども、自分のかばんに気をつけろ」と明らかに警告していますが、日本だと「防犯実施週間」です。

■ 小心碰头

「頭をぶつけないように」ということですが、日本語だとそんな言いかたはしません。間接的な注意になりますから、「頭上にご注意ください」になります。このように、直接、間接の表現がいかに大事なのかがお分かりいただけるかと思います。

こういう婉曲な意味を理解して通訳するのは大

変なことです。例えば「反対しないわけではないのですが」・・・これも反対しないことを和らげて表現したものです。具体例もいろいろとあります。「ちょっとお茶にしない？」は、実はトイレに行きたいとか、休みたいとか。「何かちょっと寒くない？」となると、これはエアコンが効き過ぎて大変寒いからちょっと切ってくれという含みもあるかと思います。

【６】受け身の文化（する文化ではなく、なる文化である）

これも日本文化の特徴です。要するに受け身の文化ですが、何でも「～なる」です。「赤くなる」「足が棒になる」「熱くなる」「話になる」「首になる」。みんな「なる」文化です。「する」文化もありますけれど、「なる」文化が圧倒的に多いのです。

■ 喫煙はあなたにとって肺がんの原因の１つとなります。疫学的な推計によると、喫煙者は肺がんにより死亡する危険性が非喫煙者に比べて約２倍から４倍高くなります。

私はたばこを吸いませんが、先日ふと見たら、日本の喫煙に対する警告は､みな「なります」でした。

通訳をするときに一番大事なのは、日本文化の特徴をいかに伝えるかです。私個人がまとめた特徴としては、中国の直接的な言い方を、できれば日本の間接的な表現にすることです。あるいは中国の中で比較的ずばり言ったことを、あいまいにする。とにかく、日本文化を十分深く理解しながら自分の通訳をやることが大事です。

ただし、政治的な会談の通訳では、言葉の主語を受け身の表現として訳すことはできません。例えば､「安倍さん、あなたは靖国神社の参拝をやめてください」ということを、どのように言えますか。「靖国神社の参拝がなされないようにお願いします」と言うことができるでしょうか。

【７】秩序の維持

これも面白いです。日本社会、文化の特徴なのですが、社会秩序を維持することが重要視されています。日本社会というのは恩と義理と人情の社会です。こういう社会ですから、規範意識は日本では非常に大事なのです。これは会社でもそうです。

例えば、吉林大学の教授が、日本語の中で、人をののしる言葉は割と少ないという研究をしたことがあります。しかも、セックスや性に関連するような話はほとんどない。あるいは相手の家庭、相手のお父さん、お母さんを傷つけるような汚い言葉はほとんど使われません。ただし、中国語の中ではあるでしょう。日本人としては、なぜ中国人がけんかするときに、相手のお父さん、お母さん、あるいは親戚の人まで全部ひっくるめて一緒に罵倒の対象にするのか分かりません。文化の違うところです。これも年功序列を重んじることが大事だからです。

去年のことだったと思いますが、私は偶然、日本の書店である本を手にました。ぱらぱらと見たら、新入社員に対する教育の本なのです。あなたが新入社員として会社に入るなら、お酒を飲むとき、酔っ払わなくても先に酔っ払ったように見せてください、先に机の下に入ってくださいと。そうでなければ、あなたはその会社ではやっていけないと。これは会社の秩序を保つ、あるいは会社の皆さんとコミュニケーションを十分図る技です。今日はここで皆さんにいろいろな会社でのテクニックを教えましたが、是非これを十分に駆使してください。

日本文化の通訳に対する作業、仕事に対する影響はいろいろありますけれども、皆さんはできるだけ敬語あるいは受け身の表現、間接表現をたくさん使ってください。中国語も大事です。例えば、江沢民さんや鄧小平さんは中国語の造詣が深いですから、通訳に対する要望が非常に高いのです。これは私がかつて仕事をしたときの写真です。

まとめますと、日本という国は非常に美しい国であると思います。私の言った「美しい国」は安倍首相が言った「美しい日本」と違いますが、同時に、日本はまた「あいまいな国」であると思います。日本はいろいろな顔を持っているということを皆さんに紹介したわけです。

これから皆さんが企業に入るにしろ、あるいは他の社会人になるにしても、こういう技を身に付けることがいかに大事か考えてください。今日の話を、皆さんが社会の中で十分生かすようにお願いしたいと思います。言葉よりも文化に対する深い理解が必要です。これが結論です。ありがとうございました。

■主題スピーチ（４）

「『日本語』の壁を超える」

徐　向東氏　（キャストコンサルティング代表取締役、ＳＧＲＡ研究チーフ）

前の３人の先生方から、素晴らしいお話がありました。私が孫先生と今西さんから「ここで話しなさい」という宿題を受けたときに、何を話せばいいかということを考えました。そして、テーマを付けてくださいと言われたときに、「日本語の壁を超える」としたのです。それは何を言いたいか、これからお話しましょう。

私も 16 歳、大学 1 年生になってから日本語を勉強し始めました。日本語を勉強している様々な中国人、日本で働いている中国人、日本関連の仕事をしている中国人を見ていると、いつも思うのは、中国の大学における外国語教育は実に素晴らしいということです。本当に立派な日本語を話せる・書ける人材が中国の大学から出てきます。日本に行ってから、中国の大学における外国語教育の素晴らしさは、特に強く感じるようになりました。

ただし、徐々にですが、もう 1 つ気づいたこともあります、それが中国の教育システムです。中国の大学は、昔のソ連のシステムをそのまま持ってきて、全部、専門を分けてやっています。例えば北京に石油大学があります。交通大学などもあるのです。専門性を追求する教育システムなのです。ですから、日本語を勉強するのはいいですが、一生懸命に勉強するがゆえに、「日本語のばか」になってしまうおそれもあります。それはどういうことかといいますと、外国語をしゃべるのはとても上手ですが、言っていることが空っぽで、思考力が付いていないということです。

思い起こせば、学生時代にも回りにそういうような人がいました。ネイティブの日本人の先生について日本語を勉強し、しゃべり方だけではなく、歩き方、手足の動かし方まで、日本人そっくりなのです。他の学生のだれもより流暢な日本語を話します。た

だし、言っていることが頭を通していなく、時には本当にばからしくて腹が立つのです。

ビジネスの世界でも同じですが、最後の最後に何が一番重要かといいますと、その人の人格です。私は、子供のころから外国語の勉強をさせて海外に留学させることに余り賛成しないのです。やはり人間には文化のルーツというものが必要だと思います。例えば、先ほど張先生が日中対訳のいろいろな素晴らしい事例をたくさん紹介されました。そのような名訳ができるのは、中国の古典の知識を持っているためです。

つまり私たちは、中国人として日本語を勉強しているのです。日本語ができる前に、日本語をぺらぺら話して日本語の文章が書ける前に、まず中国の文化をしっかり勉強しなければだめなのです。いくら日本語をうまくしゃべっても、結局、日本人に勝てることはありません。いくら日本の古典文化をいろいろと研究して、非常に造詣が深いといっても、結局、日本人にはかなわないのです。

でも、私たちは研究やビジネスの上で、日本人に勝てるものがあるとすれば、それはもう１つの文化を持っているということです。さらにいいますと、中国人の日本研究者でも、日本語にこだわる必要など全くありません。もっと門戸を開いていいと思います。実際、英語を勉強したのだけれど、途中から日本に興味を持ち始めて、すばらしい日本研究をしている中国人もいます。アメリカに留学していて、ふと日本のことが研究に値すると思い始めて、日本にやってきて日本研究を始めた。こういう学者の方が素晴らしい研究ができるのです。３つの文化を対象に比較できるから、ほかの人が発見できないことを発見できます。ビジネスの世界もアカデミックの世界も、何が一番大事かといいますと、やはり独自性だと私は思います。先ほどフロアの方が、クリエイティブという言葉を使いましたが、それは非常に大事なのです。

私は、今年（06 年）４月までずっと会社の仕事をしながら日本の大学で教えていました。、自分のビジネスと関係がないことを教えるのは大変ですから、「ベンチャービジネスとは何か」を学生と一緒に考える授業にしました。授業でいろいろなベンチャー企業の成功事例について学生とともに勉強していましたが、共通した成功要因の１つはやはりクリエイティブなことです。では人間にはどうやって独自性や創造性が生まれてくるかといいますと、１つの方法は、元々文化のルーツを持ちながら、もう１つの異なる文化、たとえば日本の文化あるいは欧米の文化を勉強して、それによって人が持っていない独自的な発想をどんどん育んでいくのです。他人が持っていない考え方を持っていると、そこに独自性が生まれてきます。そうしますと、ビジネスも非常に面白くなってきますし、他人ができないことをできるからです。もし学者になった場合は、非常に素晴らしい研究ができると思います。

皆さんご存じではないかもしれませんが、日本には『バカの壁』というベストセラーがあります。「現代人がいかに考えないままに、自分の周囲に壁を作っているか」、つまり「一元論」的な発想が他人への理解を阻む「バカの壁」となっていることを明快に分析した著書です。考えてみれば、「日本語の壁」も「バカの壁」みたいなものです。もちろん私たちは最初に日本語を一生懸命勉強しなければいけません。17 ～ 18 歳になって、「あいうえお」から始めるのは大変なのですが、しかし、いつかは、「日本語の壁」を超えなくては進歩しません。

日本留学を経て中国に帰ってきた女性の方の中に、ごくたまにみることですが、礼儀作法まで何もかも完全に日本人のように振る舞うのです。だが、私が思うには、私たちは日本語をしゃべれるけれども、あえて動き方や顔の作り方まで日本人のまねをする必要はありません。なぜかといいますと、私たちは中国人だからです。それは生まれつきのものなので、それを変える必要はありません。

もう１つ、今日の３人の先生方に異議を申し上げるつもりはありませんけれども、３人の先生方は日本の素晴らしいところをお話しになりました。私もやはり、例えば京都や奈良に行くとき、その美しさに陶酔するようなことがあります。しかし、中国の文化にもいえるとは思いますが、どの国の文化にもよいところもあれば必ずそうでないところもあります。中国は非常に雄大･壮大でスケールが大きい。我々はそのスケールの大きいところに美しさを感じます。でも、たとえば、一部では、ものづくりなどが日本と比べるとやはりどこか大ざっぱなところがあります。

これは逆のこともいえると思います。こんなことを言ったら日本の方には失礼かもしれませんが、日本を見ますと、どうしてもどこかスケールの小さいところを感じないこともないです。これはすべての日本人に言い当たることではないですが、でも、中には一部そういう現象もないわけではありません。例えば、日本の本屋に行きますと、最近は嫌中本ばかり溢れるくらい並べられています。とにかく中国を嫌がる、情緒的に中国をとらえていて、偏っているとしかいいようがないです。そういう現象は何も面白くありません。時に本当に腹が立つのは、中国人が書いているものもあることです。日本で売れるから何でもやるというのは単なる迎合としかいいようがないです。本も書けるくらい日本語は完璧ですが、言っていることはナンセンス、ただ迎合しているだけだからです。

皆さんに申し上げたいのは、最後の最後は、日本語の壁を乗り越えて、ただ言葉ができるだけではなく、一人の人格者として、独立した思考力を持たなければならないということです。そういう人になってください。それに比べると、日本語がどれほど上手かというのは、実際はそれほど重要ではないというふうに思えてならないのです。

質疑応答

（朴）　早速２部に入らせていただきます。次は主題スピーチに対するコメントです。まず４人のパネリストの方々からお願いします。

（武田）　池崎先生のビジネスセンスのお話は、非常に難しいけれども面白い内容です。これは討論すると１時間でも２時間でも足りません。私は永年、会社の経営を見ていまして、ビジネスセンスは確かに難しいと感じました。もっと簡単なところへいくと、ビジネスマナーでしょうか。皆さんは学生ですから、今度、社会人、会社の社員になると、やはりそれなりのマナーがあります。マナーにもいろいろあります。学生の生活の延長ではなく､自分の行動、考え方を切り替える必要があります。例えば富士通の場合は、新入社員に対しては、ビジネスライティングです。ビジネスで使う文章をどのように書くか。もっと細かくいうと､礼状を書く練習をします。学生時代に友達同士で書くレターとビジネスの上で書くレターは違います。世界共通の常識だと思いますが、ビジネスレターの書き方としては、天と地が必要ですし、スペースを残すとかいろいろあります。そういうことが、難しいビジネスセンスの話をする前の一番単純なビジネスマナーです。ビジネスマナーの中でもっと具体化するとビジネスライティング、その中でもっと具体的にいうとビジネスレターの書き方、こういう１つ１つが必要なのでは

ないかと思います。

徐さんの話も非常に面白かったです。確かに日本語を一生懸命勉強していても、これは１つの道具だということです。ほかのことを知らないと、「日本語ばか」ではないとしても、「言語明瞭、意味不明」になります。これは日本語か中国語かよく分かりませんが、４文字熟語＋４文字熟語です。確かに私の会社でも、いろいろな人が報告に来るのですが、私には意味がよく分からないことが時々あります。「言語明瞭、意味不明」なのです。

日本語は飽くまでも１つの道具で、日本語を勉強するだけではなく、その前に中国の文化を知らないといけません。中国語をまともにしゃべれなかったら、日本語が幾らしゃべれても多分通じないと思います。徐さんのスピーチに、私は全く同感です。コメントは以上です。

（池崎） 先ほど長く話し過ぎましたので、できるだけ短くします。

徐さんが先ほどおっしゃった、まず自分のアイデンティティを持つということはとても大事で、私は日本語教師の立場で、日本人にも同じことを言います。

今、日本では小学校４年生から英語の義務教育化が必要かどうかということが、かなり話し合われています。前の小泉政権のときにはそういう流れができつつありましたが、小学校４年生のときから英語を学校でやることには、私は反対です。というのは、母語である日本語教育がきちんと行われていない日本の現況では、英語を義務教育に取り入れるよりも、幼少期からの日本語教育を見直すことが必要で、大事だと思うからです。このまま進めば、日本人は日本語も中途半端、英語も中途半端になってしまうという恐れを感じています。日本人なら、まず、言いたいことを、きっちりと日本語で考えをまとめ、メモに落とし、文章として構成し、それを発表できて、初めてコミュニケーションの基礎ができたと言えるのではと思います。ですから、自国の言葉、母語が満足にできない人は、第二第三の言語である外国語習得がうまくいかないだろうと思っています。徐さんは先ほどそのようなコンテクストでおっしゃったのではないかなと思いましたが、私も非常にそう思います。

（張） 池崎先生にご意見をお聞きしたいと思います。先ほどビジネス日本語、あるいはビジネス人材育成に関するとても素晴らしい構想をお聞きしました。お話の中に、日本企業でインターンをする、１社ではなく多種多様の業種に触れることが大事だとおっしゃいましたが、１つ私はちょっと心配していることがあります。

日本企業は、武田さんからもお話があったように、終身雇用制、あるいはゼロから育成するという傾向を持っていますから、企業から企業へと次々と渡り鳥みたいに転職していくことになると、人間は育ちますけれども、それなりに職業も不安定になるのではないかという心配もありますし、ある年になると転職できなくなる、あるいは失業するおそれもあるのではないかという一抹の不安があります。そこはいかがなものでしょうか。

（池崎） 実は私は、企業に勤めるだけが仕事のあり方だとは思っていません。たとえば私がビジネス日本語協会という日本語の学校を作ったのは 15 年前ですから、私はそんなに若くなかったのですが、私は大変でも、自分がとても好きで、どうしてもやりたいことを実現するために努力するような人生を送っていきたいという価値観を持っていますから、企業にいること＝安定している人生だというふうには余り思わないできました。

そういう意味では、日本人としては非常にマイナーな存在であり、考え方もマイノリティに属すのではないかと思います。でも、夢は１つ１つ実現します。自分の会社もゼロから、このジャパン・リターン・プログラムもゼロから始めました。でも、よかったなと思っています。

企業に勤めなくてもいろいろな、やりがいのある仕事はできると思っているので、申し訳ないのですけれども、今、張先生がおっしゃったご質問にお答えするには、私は余り向かないのではないかと思います。

（武田）　私は日本の大学院を卒業して、指導教授に「日本で就職しなさい、コンピュータを勉強したので、コンピュータのメーカーに行きなさい」と言われました。それで、推薦してやるから、日本ＩＢＭ、日立、日電、富士通の４社からどれか１つ選ぶようにと言われました。私が「どの会社が一番若いですか。どの会社が一番自由に仕事をやらせてもらえますか」と先生に聞いたら、「それは富士通だ」「じゃあ富士通をお願いします」と。それで富士通に入りました。

私は一生ずっと富士通に勤めるつもりはなかったのです。私だけではなくて、富士通のすべての従業員は、富士通との間に終身雇用という契約は一切ありません。日本の会社の慣習だと、当然、入ったら 60 歳まで雇用すると思いますけれども、そういう契約はありません。私も入社したときに、自分で 60 歳まで勤めるつもりもありませんでした。しかし、会社に入ってみたら、自分の好きな仕事をやらせてもらえました。仕事がどんどん面白くなって、ついつい二十数年間、富士通にいたのです。

ですから、皆さんが仕事を選ぶときに、自分の好きな仕事を選ぶことも必要です。仕事に就いたら、その仕事を好きになって、その中から楽しみを見つければ、自然に成果が出てくるのです。終身雇用とか、いつ辞めるかを考えずに、仕事を大事に、好きになるように頑張れば、自然に成果が出てくると思います。

（徐）　３人の先生の順番で申し上げます。

池崎先生の話を伺いますと、ビジネス日本語はすごく重要だと思います。メール１つでちゃんと伝えられるかどうか。その中で、失礼にならないようなメールの書き方など、そういうことはすごく大事です。話し方ではなくて、メールの書き方です。今のビジネスにおいては、プレゼンテーション能力、自分自身を表現する能力が非常に重要ですので、正しいビジネス日本語を身に付けなければいけないとは思います。

そこで１つ、中国人としての経験を申し上げますと、例えば私と池崎先生を比べますと、完全にビジネス日本語の美しさでは負けてしまうと思います。ただ、そんなにきれいに書けなくても、明瞭に、簡潔に書くように努める。それから、よくあるパターンで、ご批判をいただくかもしれませんが、例えば、「お世話になります」と最初に一言書く。仕事の話ですし、中国人ですからそんなにたくさんきれいなことを書けなくても、日本人は「この人は失礼だ」とはいちいち思いません。そういうふうに、簡潔に書くように努める手段もあるのではないかと思います。

武田先生のお話をお聞きして感じたことがあります。私は日本の大学でもしばらく教えていましたが、中国人だけではなくて、今の日本の若者も、日本的な伝統的な考え方、年功序列的な考え方、集団の和を大事にするといった古い制度にちょっとついていけないのだと思います。

特に中国の上海や北京の日系企業においては、転職が激しいです。中国の若者は、今チャンスが多いので、ちょっとだけ勉強してすぐ辞めてしまう。しかしながら、私が申し上げたいのは、少し落ち着いてほしいということです。中国人が日本の企業に入ると、今までの中国式の考え方とは違って、日本的な考え方に直面します。それに適応できないと、「会社がけしからん」と思ってすぐ辞めてしまう。今の言葉でいうとリセットです。今はみんなインターネット世代ですから、オンラインゲームと同じように、すぐリセットすればいいと。そういうことを性急に、短気にやらずに、ちょっと一歩置いて、その企業に入ったら、もしかしたら勉強になることがあるかもしれないので、辞めたいなら、せめて少しでも何かしらの能力を身に付けてから辞めてもいいのではないかと思います。すぐ辞めるというのは、やめた方がいいのではないかと思います。

最後に、張先生の話を聞いて、本当に素晴らしい日本語の授業だと思いました。張先生の名刺を見ますと、今ビジネスをやっていらっしゃいます。もちろん鄧小平さんの通訳もされたくらい、日本の文化、文学の造詣が非常に深い。ビジネスマンであっても、本当の教養をちゃんと持っていれば、これは非常に得になると思います。世の中はそんなに堅苦しく、学者をやらなければいけない、ビジネスマンをやるから学問を軽蔑するといったことはありません。最後に、やはり武田先生や池崎先生がおっしゃったように、あなたが何をやりたいかが大切で、好きなものを追求して楽しくやっていれば、一番楽しい人生になるのではないかと思います。

（朴） ありがとうございました。実は私が言おうとした内容を徐さんが全部言ってしまったので、私はまとめのお話はもうやめて、次にフロアからの質疑応答に入ります。

（Ｑ１） 北京科技大学で日本語をこの９月から教えることになりました。一番大変だと思っているのが、企業の面接と卒業論文の書き方という授業です。是非学生によいメッセージをと思って、今日参加しました。

ビジネスセンスということについて質問です。先ほど池崎先生がおっしゃった心遣いや思いやりなどは、そうだなと思うのですが、そのほかにもう少し違った具体例をいただけないでしょうか。コピーをきちんと取るというのも、私がＯＬをしていたときには気をつけていたことなので分かるのですが、もう少し違ったビジネスセンスというものを提示していただきたいと思います。

（池崎） 先ほどの休憩のときに、ほかの方の話も聞いてみましょうということでしたので、武田先生、いかがですか。

（武田） ビジネスセンスは非常に難しいのです。富士通もアメリカにいろんな会社があって、私はよく出張に行きましたが、向こうには向こうのビジネスセンスがあるのですね。日本にも日本のビジネスセンスがある。中国にも中国のビジネスセンスがあると思います。例えばの話ですが、アメリカと日本では、「いらっしゃい」というジェスチャーが違います。ですから、一律にはできないと思います。

ただ、皆さんが日本語を勉強して、日本語のビジネスセンスは知った方がいいと思って、あえて申し上げますと、なるべく相手に迷惑をかけないようにというのが日本人の心構えです。相手に迷惑をかけないということは、１つの軸だと思います。ところが騎馬民族だとそうではなくて、自分の意思を強引に相手に伝えるのです。それが違うところです。

こういったことがビジネスセンスとかいろいろ言っていても切りがありませんが、心構えというのは日常生活でも同じで、ビジネスをやっているうえでも、相手になるべく迷惑をかけないということです。先ほど池崎先生がおっしゃったように、コピーで斜めになると相手に迷惑です。そういう発想で、皆さんの知恵で考えれば、きっといいビジネスセンスになると思います。

（池崎） 言葉の上でいえば、例えば、分かりやすく明瞭な話し方をする、といったようなことではないでしょうか。相手が本当に分かっているかどうか確かめずに自分が一方的に話すのは、ビジネス交渉でも電話のやり取りでもミーティングでも、余りうまくいくことはないですね。そういったときに、明瞭な話し方もそうですし、心遣いの言葉を添えられるかとかもビジネスセンスに左右されることと思います。

例えば、先ほども休憩のときにお話ししていたのですけれども、名刺のやり取りのときも、中国の学生さんは、名刺を自分の方に向けたまま渡すことがよくあるようですが、日本ではだめですよねと。名刺を出すときには、必ず両手を添えて、相手側に向けてきちんと見やすいようにお渡しすることが大事なことです。

また、電話に最初に出るときの名乗りもそうで

す。「どこどこの何々ですが、何何さんいらっしゃいますか？」と言われたら、「はい、何何はおります。大変お世話になっております」というお礼の言葉を添えることも、日本では人間関係をスムーズにいかせる１つのよい方法と思われています。このような表現を言った方が、相手に気持ちよく受けとめてもらえるということだと思います。

ただ、それを全部できないと日本人といいコミュニケーションが取れませんよという意味では全くなくて、そういうことができれば、日本社会では自分がより早く、より自然に受け止めてもらえることになるので、結局は得ではないかなと思うのです。

私たちは、「ビジネス日本語」というものはこういうものだから「ビジネス日本語」を学ぶべきとは思っているわけではありません。ビジネスというのは片仮名で書きますね。これは同僚の話ですが、あるときにパソコンで、「ビジネス」を入力した時にタッチを間違えたらしく、「美人ネス」と出てきたのです。それで、「ビジネス日本語」は、「美人ネス日本語」＝「美しい人が使う日本語」だと、私たちなりに解釈しています。

いいキャリアを積み重ねていけば、いい人生を送ることができるようになる。いい人生を送る、いい仕事をしていく、達成感のある仕事をしていくために、どのように人間関係を作っていくか、相互理解していくか、そのために役に立つツール、それが「ビジネス日本語」です。だから「美人ネス日本語」を手段として有効に活かして欲しいと思っています。先ほど時間がなかったのですが、最後に皆さんにお見せしたかったのは、「ビジネス日本語」は「美しい日本語」というフリップです。

日本語でも、中国語でも、どの言語にも共通だと思いますが、自分が思い描く、自分の将来像にふさわしい、立派な言葉を話せるようになっておくこと、勉強して身に付けていくことが大事なのではないでしょうか。そのためには、言葉に敏感になることです。自分が使っている言葉はどういう言葉かということを客観的に眺める。その作業が大事なのではないかと思います。

（Ｑ２）　初めまして。私は北京大学の２年生です。先ほど先生方の発表を聞かせていただいて、ずっと頭の中に思い続けている問題があります。

先ほど徐先生もおっしゃったとおり、私が初めて日本語を勉強したときには、まるで幼稚園みたいで、いつもとても簡単な言葉を繰り返して勉強していました。今は２年生で、学校で発表やプレゼンテーションなどたくさんありますが、そのときによく思うのが、たとえ語学のレベルが上がったとしても、自分が思ったことを論理的にはっきり表すことがとても難しいということです。

このことは、語学という専門を勉強するだけで足りないと思いました。ですから、語学以外の思考力をどうやって深めるかを先生方に伺いたいと思います。特に日本語専門の先生たちは、学生時代に語学の勉強以外にどうやって自分の思考力を深めたか。これは、将来学者になるとしても、日本企業に勤めるにしても、とても重要なことだと思いますので、ぜひ伺いたいと思います。

（徐）　この問題は、私が現実に仕事をする上で毎日直面していることです。正しいことは言えないかもしれませんので、他の先生方にもご指導いただきたいと思います。

中国の大学では、残念ながら思考力やプレゼンテーション能力といったことは、少なくとも私の時代においてはなかったのです。非常に損をしたと思っています。日本語の勉強には、ヒアリングの授業、精読の授業、作文の授業と、いろいろありましたが、あくまでも言語のトレーニングでした。思考能力の養成は伴っていなかったです。ただ単に言葉をしゃべっているだけで。テープレコーダーになっているようなものです。ビジネスだけではありません。学生もそうなのです。プレゼンテーションをするためには、思考力をトレーニングしないといけません。

実例を申し上げますと、メールを使ってクライアントに何かしらの連絡する時、書き終わった後すぐにメールを送らず、もう一回読み直して、自分の伝えたいことをロジカルに伝えられたかどうかを、チェックした方がいいと思います。仕事をするときには、ただステップを踏んで仕事をするのではありません。私がいつも言うのは、我々は手足を使って仕事をしているわけではなく、頭を使って仕事をしているということです。

私の言い方が間違っていれば是非指摘してほしいですが、日本企業の１つのいけないところに、今では特にそうですけれども、体で営業するというものがありますね。とにかくとことん体を動かせばいい。体育会系という言葉がありまして、元々部活をやっていて、その習慣をそのままビジネス世界に持ってきているわけです。

日本はＩＴ情報化時代に入るまでは工業化時代でしたから、日本のやり方は正しかったのです。とにかく集団で、チームワークで、和の精神を大事にして、とことん手足を動かしてやればいい。余り頭で考えていなかったのです。

ただし、今の時代になってきますと、頭で考えることはすごく重要です。私がいつも会社で言うことは、「すぐメールを送るのはやめてください」「頭でまず考えなさい」「あなたは仕事で、何を目指して最後は何を達成したいのか。成果、目的とは何なのかを良く考えてください」ということです。

もう１つは、何が一番効率的かということです。我々はコンサルティング業ですから、クライアントからお金を頂いてやっています。だからといって、クライアントが言っていることがすべて正しいわけではありません。クライアントは神様かもしれません。でも、場合によってはクライアントが非常に間違っていることを言っている可能性もあります。そのままやってしまうと大変なことになってしまいますから、自分の方で先に考えなさいと言います。物事を考えるというのはそういうことです。目的とは何か。何が一番正しいやり方なのか。何が一番効率のいいやり方なのか。そういうことを常に考えながら、仕事を進めていかなければいけないのです。

それができれば、今度はクライアントに対して、「あなたはこういう間違ったことを言いました」と言えるようになります。もちろんストレートに言うのは失礼ですけれども。そんなときは、池崎先生からいろいろと書き方を教えていただかなければいけません。礼儀正しく言うけれども、ロジカルに「こうこうこうだから、こうしなければいけない」と主張する必要があります。その主張には説得力がないとクライアントはついてきません。それは正に思考力です。ロジカルに説明できると、相手は納得できます。そういうことが正に必要とされるのです。

今度はそれをプレゼンしていきます。非常にいい仕事ができたということをちゃんと伝えなければいけない。クライアントが聞いていて納得して、「やっぱりそうですね」となるように。あくまで「我々はクライアントのためにやっています」ということです。それをうまく説明できなければいけません。

実際の仕事の中で、中国人の良さを生かすべきです。日本人には非常に生真面目な気質を持つ方が多いです。ただし、先ほど張先生がおっしゃったように、日本の言語はちょっとあいまいで、はっきり

しない部分があります。でも、ビジネスの場合は、言っている内容が正しいだけではすまない、時には相手の心をゲットしなければならないのです。そこにエモーションの部分も入らなくてはいけません。エモーションというのは感情です。例えばジョークを言ったり、ちょっとしたユーモアで相手の心を動かしたりするのです。そういうことがあれば、より効果があります。中国の文化はそういうことに結構たけている部分がありますから、そこであなたの中国人としての良さを生かすことができます。そのときには、日本語を勉強し、しかも中国の文化をよく理解している中国人だから、やはり他人には及ばない何かしらのものを持つことができるいうことになります。

（池崎）　徐さんは日本で活躍するビジネスマンとしていろいろお話ししていらっしゃるということはよく分かるのですが、私はマイノリティの所にいますので違った見方になるかもしれません。私は、よく大企業とお付き合いをしています。というのは、私はＮＰＯを運営していますから、日本の企業に寄付金をお願いに行くわけです。毎日のように行きます。このジャパン・リターン・プログラムの活動には年間 6000 万円ぐらいかかりますし、その 6000 万円の財源をどこに求めるかといいますと、日本人の、日本の企業です。あらゆる所をお訪ねして、理解をしていただくべく懸命の努力をしています。その結果、かなりのお金を寄付していただきます。そのお金で、日本語を勉強している、日本のファンになってくれるであろう人たちを世界から招待する仕事をしています。

ですから、基本的に、この仕事ができること自体、ものすごくありがたいというスタンスに立っています。もちろん、お金をいただくまでにいろいろなことがあります。そういう苦労みたいなものはたくさんあるわけですけれども、それは忘れるようにしていますし、実際、忘れます。忘れないとまた新しい所に出かけていく気力が湧いてきませんし、１つ１つ日本の企業の、こういうところがよくないのではないか、こういうふうにしたらいいのではないかというアプローチはどうもなじまないですし、なかなかそういう部分については申し上げられません。

けれども、先ほどのビジネスセンスにちょっと戻りますが、１つのヒントは、「聞き上手になる」ことです。話すことがとても上手ということも大切ですが、私はむしろ、「聞き上手になる」ことをお勧めします。人の話を聞けばいろいろな情報を得ることができますし、ほかの人が何を考えているかが分かったら、自分が対応できるようになるからです。教えてもらう材料がそこにはたくさんありますので、とにかく聞く。聞くことが上手な人は、話すことも上手だろうと思います。それも大きなビジネスセンスにつながっていくことではないかと思います。的が外れていますが、すみません。

（Ｑ３）　こんにちは。私は北京外国語大学２年生です。先ほど武田さんが富士通について紹介されたのですが、日系企業が求める人材のポイントが２つある、その１つは、１つでもいいから何か得意なことを身に付けること、もう１つはコミュニケーションだとおっしゃいました。

私がお聞きしたいのは、私たちのほとんどは専門が日本語で、大学を卒業したら、得意な技というと日本語しかないような気がしますが、それはちょっと心細いです。そんな私たちでも、日系企業の求める人材の要求に合うのでしょうか。日本語のほかにまた何か勉強しなければならないことがあるのでしょうか。

（武田）　実例をいいますと、日系企業がこちらでどういう仕事をやろうとしていても、日本人と中国人のコミュニケーションが必要で、どうしても通訳が必要になります。私が富士通で 20 ～ 30 年ずっと見ていますと、何年間かやっていたら、会社のいろいろな事情を一番知っているのは通訳です。会社が最終的に、「この会社の総経理はもう通訳にするしかない」と。

なぜかというと、通訳をするときに、事前に日

本側のいろいろな事情を勉強しなければならない。同時に中国側の事情も勉強しなければならない。両方の事情が分からないと、うまく通訳できません。それで自然に自分で勉強していって、いろいろな状況が分かってきます。

ですから、日本語だけでは将来、日系企業で就職できないということは決してありません。あなたたちは、よその人よりも一歩先に、いわゆるジェネラルマネジャーに有利なポジションにあるのです。キーポイントは、まずはいろいろなことを勉強することです。

もう１つの例は、例えば今、富士通中国で採用した人は、日本語を大学で４年間勉強して、そのあとは弁護士の法律事務所で翻訳の仕事をやっていたのです。法律事務所で翻訳の仕事をやるには、まず法律のことを知らないとだめです。仕事をやりながら一生懸命法律を勉強したのです。そして、大学院へ行って２年間、法律の専門の勉強をして、今度は富士通に来て、富士通中国の法律担当になりました。

ですから、ある意味で、日系企業で就職する中では、皆さんが一番有利なスタートにいるのです。安心してください。ただ､これから勉強が必要です。

（Ｑ４）　こんにちは。私は北京語言大学２年生です。この機会は私にとって、とても大切だと思います。私は、日本語の勉強を１年生のときに始めました。私は朴先生の生徒です。３年生になったら、私のクラスは日本に留学して、日本の大学で企業法律を勉強するつもりです。そこで、日本の大学で法律を勉強することについてのアドバイスを伺いたいと思います。その前の２年間は、法律を勉強することはありません。

（朴）　日本の大学で法律を勉強するにはどうすればいいかということですね。

（徐）　たとえば、法曹界では、最近日本でもロースクールができて、少しは司法界への間口を広げるようになりました。外国人も取得しようと思えばできないことはないですけれども、日本人でさえ難しいと言われるくらいの試験だと思います。現に、中国人で日本の弁護士の資格を取得した事例はまだ少ないです。日本国内の法務案件なら、やはり日本人弁護士に頼むことが多いだろうと思います。もし日中間の法務分野で活躍することを目指すなら、中国の弁護士資格を取得しないといけないでしょう。中国の弁護士でありながら、日本のビジネスについても理解しており、しかも日本語ができる。そうすると強いセールスポイントにはなるでしょう。先ほどの話の繰り返しになりますが、日本の法律には詳しくても、中国のことは全然分からないなら、中国ビジネスの分野では通用しないでしょう。つまり、もし日本企業があなたに何かを頼むとすれば、やはりあなたが中国人だからこそ価値があると思います。あくまでも門外漢としての発言ですが、少しでもお役に立つと嬉しく思います。

（池崎）　大学のことはよく分からないのですけれども、私の生徒にも弁護士さんがいますので、日本で外国人の弁護士さんがどのくらい活躍しているかということは申し上げられます。実はもう 20 年前から外国籍の弁護士さんは日本で活躍していました。例えばイタリア人、アメリカ人、イギリス人の弁護士を私は 20 年前から教えてきました。その人たちは、日本語を使って自国の案件を随分処理していました。つい何年か前に日本の法律が変わりまして、外国籍の弁護士さんも正式な弁護士登録ができるようになったと思います。

ですから、中国人の弁護士さんも、多分、こちらで弁護士資格を取られて、しかも国際弁護士事務所に入られるか何か方法があると思います。それにしても、まずこちらの弁護士資格をお取りになっていないと難しいのではないかと思います。こちらで取られてから、日本で日本語を使って日本関係の弁護士業もなさるという方法は非常にいいと思います。先ほどおっしゃったように、それが売りになると思います。

（徐）　追加ですけれども、まだ中国の方が弁護士資格を断然取りやすいです。日本の司法試験は世界で一番難しい試験といわれています。

（Ｑ５）　初めまして。北京語言大学４年生です。実は１回、池崎さんとお会いしたことがあります。こういうふうに再びお会いできて本当にうれしく思っています。

私の友達の中に三井物産に勤めている人がいます。その人はすごくしっかりしていて、会社派遣で北京語言大学で１年間ぐらい勉強したことがあります。それで、三井物産の印象も、その人の印象もすごくよかったのです。それで、張潤北先生に、三井物産の企業理念や、張先生が理解されているビジネスセンスについて伺いたいのです。

（張）　本来は、その話は武田総経理にお話ししていただくのが一番適切かと思いますが、先ほどのビジネスセンスに関する補足をしたいと思います。私はむしろビジネスマナーと言った方が理解しやすいと思います。

ビジネスマナーについて、３つの内容があると考えます。１つは概念です。例えば、一体どういった企業文化を持つべきなのか。これは非常に抽象的なものなのです。もう１つ、具体的なものとしては、実際に技能とは何なのか。どのようなマナーを身に付けることが必要でしょうか。例えば今ビジネスライティングやビジネス交渉能力、あるいはお客様への対応といった様々なマナーが含まれています。３つ目に、会社が求めるものは何なのか。例えば今、武田総経理もおっしゃったチャレンジ精神、あるいは社会に対する貢献度といったものがあります。

私の勤務先は三井物産ではなく、三井化学です。皆さんご存じのように、三井グループは戦前日本で最大のグループだったのですけれども、第二次世界大戦が終わった時点で、アメリカ占領軍が、日本の軍国主義は日本のいわゆる財閥から生まれたという認識を持っていましたので、財閥を解散させる政策を打ち出したわけです。例えばトヨタや東芝にしても、前はみんな三井グループのメンバーだったのです。今でも緩やかな関連は持っています。三井化学はその中の化学専門会社です。

当社の企業精神、企業理念は、先ほど触れたように社会に対する貢献、あるいは武田総経理も触れられましたように、従業員の幸福です。もちろん、トップとしては投資家に対する利益が一番大事です。会社、投資家、社員に対する利益の供与と社会に対する貢献です。大きくいうと世界にどれだけ貢献できるかということが当社のモットーです。

たまたま先日、会社からもらったものがあります。三井化学グループ行動指針というものです。どういったものがあるかというと、誠実な行動。これは法令・ルールの遵守、正直、差別禁止、公正、公平、透明性です。もう１つは人と社会を大切に。これは先ほどもちょっと触れましたが、安全第一、地球環境への貢献、お客様の満足、地域への貢献、健康促進、多様性の尊重です。３つ目は夢のあるものづくり。これはチャレンジ精神、創造性、自己研鑽、技術伝承、チームワークです。こういった３つの要素に、自分が誠実に行動すること、人と社会を大切にすること、夢のあるものづくりを目指すこと、これが当社の企業方針といえます。これでお答えになっているかどうか分かりませんが。

（Ｑ６）　北京語言大学の学生です。今日は先生たちのご発言を聞かせていただいて、本当によい勉強になりました。先生方は、自国の文化、アイデンティティを保つということをよくおっしゃいましたが、その自国の文化をどうやって保てばよいかお聞きしたいのです。「郷に入っては郷に従え」ということわざは、他国の文化を尊重しなければいけないという意味ですよね。その他国の文化を尊重する上で、自分の文化をどうやって保つかを知りたいのです。

（徐）　まず気になっていますけれども、男性はなぜ質問しないのですか。学部のころは、女性の方が言葉は上手です。それはよく分かります。でも、男性は負けてはいけませんから、中国語でもいいですか

ら、どんどん質問してください。

そもそも今のご質問はかなり答えにくい大きな質問です。博士論文のテーマになるくらいだと思います。私が申し上げたかったのは、相手の文化の素晴らしさをちゃんと尊重することです。それと同時に、私は文化の問題ではなく個別の問題だと思っていますが、どこの国にも個別の社会現象で、美しい部分もあれば醜い部分もあるわけです。

もちろん、中国人や中国社会の中でもすべてが美しいというわけではありません。たまたま今日、私が朝乗ってきた飛行機で、ものすごく高価なスーツを着て、胸のポケットにハンカチを飾ったとても立派なカッコーをしている人がいました。香港かどこかの大金持ちじゃないかと思わせるような感じの人です。私は雑誌を読んでいたのですが、ちょっとトイレに行っている間に雑誌が取られて読まれていました。私は「どうぞ、読んでください」とにこにこして言いました。ところが、飛行機を降りる前にその人が、雑誌をぽいっと私の所へ投げ返したのです。その人が立ち上がったときに、私は一言「あなたは、私に「謝謝」と言うべきです」と言いました。さすがにその人もちょっと恥ずかしかったようで、今ちょっと携帯電話をかけているからどうのこうのと言い出したのですが、さきほど武田先生の話を聞いたら、あの人は絶対に騎馬民族だろうなと思いました（笑）。

要は、私も、日本人のきめ細かさや礼儀正しさなどを、無意識のうちには影響を受けているのかもしれません。最悪のパターンは、日本人が中国にやってきて中国の悪いところばかり学んでいる。あるいは、その逆で、中国人が日本にいって日本の悪いところばかり影響を受けることです。

私たちは、自分の大事なところを大切にしながら、相手の素晴らしいところに対してはきちんと敬意を払い、時には自分の中にも受け入れる必要があります。それと同時に、やはり理性的に、自分の中の悪い部分を反省しながら、他人のよくない部分もきちんと指摘できるようしなければいけません。こうすれば何も失礼に当たらなく、かえって相手の尊敬を受けると思います。ただ単に相手に迎合するだけでは、かえって尊敬されないと思います。ちょっと抽象的な答えになってしまいましたが…

（張）　今、文化の話がありましたが、一言補足します。

三井化学もそうですが、中国に社員を派遣してくる場合は、中国語のできる社員を選んでいました。しかし、私の主張は、中国語ができることはもっともなことだが、一番大事なのは、中国文化を分かってくれている、あるいは中国文化に対する理解がある人を派遣してほしいということです。それが一番大事だと思います。

もう１つ、立場を置き換えてみますと、私が三井化学の中でいかに自分が中国人であることを証明するかという問題になります。これは中国文化を証明することにつながります。私はやはり中国人ですから、どうしても中国人的な習慣、行動、言動は持っています。しかし、やはり中国人だから中国的で良いと一概には言えません。正しいものもあれば、間違っているものもある。日本の会社でやっていくには、会社にふさわしくない自分の行動、言動を正していくことが大事だと思います。

それを正すことは、日本の方から見て、あなたが中国人ではない、あるいは中国人を曲げて解釈するようなことには決してつながらないと思います。やはり、どこでも共通する正しさ、真理はありますから、それを曲げないでやることが非常に大事です。それは言い換えてみれば、中国文化を証明したということになります。

例えば、今年１月中旬に、私は三井化学の工場で300人ほどの部長以上の工場幹部の前で、中国人の歴史観、歴史認識、あるいは中国人の対日観について講演しました。今まで私が外交部に勤務したときの中国の政策に対する理解と日本社会に対する私の理解を織り交ぜて話をしたわけです。結局、理解してくれた方も多かったですし、こんなことはなかなか理解できないという方もいらっしゃいます。それはそれでかまわないのです。私は、それなりに、中国の文化を堅持したいという意識を持っていま

す。

（池崎）　今日は「若者の未来と日本語」という題ですから、ジャパン・リターン・プログラムの話を１つだけご紹介させていただきます。

今年の夏の日本語サミットは８回目でした。16か国の16名が世界の様々なところからパネリストとして参加してくれました。１人、ニューカレドニアから参加した人がいます。この人の日本語学習歴は２年ぐらいなので、とつとつとした日本語でしたが、私どもがあるところを非常に評価して日本に招聘しました。

彼女は「日本語サミット」で何を発表したかといいますと、自分はニューカレドニア人であるけれども、両親はベトナム人で、ベトナム戦争のときに亡命して、難民としてニューカレドニアに行き、そこで育った。幸いなことに、自分は２年前に両親と一緒にベトナムに里帰りすることができた。でも、そのときベトナムで、「あなたはベトナム人ではない」と言われて非常に悲しかった。でもニューカレドニアにいると、「あなたはニューカレドニア人ではない」と言われる。これはとてもつらいことだと。

でも、日本語サミットに来て、共通言語の日本語だけで16か国16名、世界のいろいろな所から来た人たちがいろいろな問題を持ちよって交流し、それぞれの国の人と深くたくさん話し合ったので、「自分の国籍は世界だと思うようになった。だから今は、自分は世界人だと思って、悲しくなくなった」と言いました。

ＪＲＰは、「日本語で手をつなごう、世界のお友達と兄弟と」という言葉を合い言葉に活動しています。ニューカレドニアのパネリストであるソフィの言葉使いは流暢とはいえませんでしたけれども、「平和―国と世界」を考える上で、非常に訴えるものがあったと思います。

ですから、「若者の未来と日本語」というテーマですので、せっかく日本語を勉強してくださっている皆さんが、日本語を勉強していてよかったと思えるような関係を将来も作っていきたいですし、私どもは皆さんのような方々が日本のファンになっていただけるよう、是非お手伝いしたいと思っています。

それで、過去に招聘した人たち130人の中の代表を集めて、来年、北京でＪＲＰの会議をしようと思っています。いろいろな壁や、乗り越えなくてはいけないところがたくさんあるかもしれませんけれども、この北京で、来年また皆さんにお目にかかれたら、日本語をツールにして、皆さんと平和について語り合えたら、とてもうれしいと思います。

今日の出会いに本当に感謝します。

（朴）　ありがとうございました。おっしゃりたいことはまだまだたくさんあると思いますけれども、時間がオーバーしてしまいましたので、質問などありましたら、終わってから個別にパネリストの先生方に聞いてください。

最後にパネリストの方々に、１分間で、今日のテーマの、「若者の未来と日本語」をつなげる、すごく印象に残る言葉を一言お願いします。

（徐）　２点です。まず男性が発言しなかったのがちょっと残念だったことです。２番目は、さきほどの発言の中で２人が、「先生方の話を聞いていただきます」とおっしゃいましたが、これは正しくいうと、「先生方の話を聞いて、あるいは聞かせていただいて」と言います。学生ですから間違っても全然かまいません。間違いをしないと絶対進歩しないから、間違っても恥じることはありませんので、どんどん発言してください。

（武田）　私が今日パネリストとして参加して非常に気になったのは、中国で最高の学府、ＩＱが一番高い皆さんが、日本あるいは日本企業に対してどういうイメージを持っているかということです。

私が言いたいのは、今の日本あるいは日本の企業は、恐らく皆さんが描いたイメージから大分変わっています。少なくとも、富士通でいえば年功序列を始め企業のシステムや文化が大分変わりました。例えば、先ほど張先生がおっしゃったように、新入社

員が日本企業に入ると、上司と酒を飲みに行って、先に酔わないとだめということは全然ありません。富士通中国で、恐らく私が一番年上だから一番トップに立っているのですが、私が会社の若い人とお酒を飲みに行くと、私は先に酔っ払ってしまいます。ですから、皆さんがもしも好奇心があったら、卒業したら是非富士通に就職に来てください。

（池崎） 私も日本でビジネス日本語協会とＪＲＰという２つの活動をしていますので、我こそと思う方は、是非事務局に就職活動にいらしてください。お待ちしています。それから、皆さん、これからも夢を持って頑張っていきましょう。

（張） ３点ほどお話ししたいと思います。

１つは、先ほど申し上げたように、日本を全く知らない裏口入学の私が日本文化を語る、しかも中国の最高の学府で語る機会が得られまして、非常に感謝しています。

２点目は、今日のシンポジウムを通じて、私も新しい人生の道を発見したとでもいいますか、ビジネス日本語の講師にもなれる道が開かれました。どこか雇っていただけませんか（笑）。今後の交流にも期待しています。

もう１つは、先ほどもご紹介しましたように、三井化学は非常に素晴らしい会社ですので、会社をアピールします。今、中国事業を展開している最中ですので。ただし、酒の飲める程度につきましては、武田総経理と少し意見が食い違うかもしれません（笑）。私は全然酒が飲めません。だから酔っ払うこともないし、みんなで飲みに行っても私は酔っ払わないのです。決して威張っているわけではないのです。会社によっていろいろ違いますから、一概にはいえません。どうもありがとうございました。

（朴） 最後に一言、まとめます。

今日のテーマは、「若者たちの未来と日本語」ですから、絶対に皆さんのためになります。今日は４人の先生方を招聘しましたが、それぞれのご意見をお持ちで、結局はそれぞれの主張が違うからこそ、面白いと思います。日本語のセンスなど、私が理解しているのと池崎さんが理解しているのとは、また違うなと思いました。

日本語と出会った皆さんが、これから日本語をどういうふうに生かしていけばいいのか、日本の企業や日本の社会ではどういう人材を必要としているのかということが分かり、このフォーラムを通じて少しでも何か前が見えてきたとしたら、これは成功だと思います。

日本語、日本文化、それからチャレンジ精神とかお話に出ましたけれど、最も大事なのは、今日一番若い徐さんが主張されていた、中身のある日本語ということです。日本語だけではなくて、中身のあるということです。それで日本語の壁を越えて主張することが大切だと思います。

こういうことで、私のまとめはこれで終わります。

（孫） パネリストの方、皆さん、長時間お疲れさまでした。もう一度、大きな拍手をお送りください（拍手）。

総合司会ということで、最後に一言二言、申し上

げたいと思います。

先ほど５～６人から質問がありましたが、やはりその質問の内容から聞くと、このテーマにぴったりだと思いました。日本語をやっている皆さんは、自分の将来がどうなるのかということを考えているようです。それぞれ自分の考えも持っていると思います。それはそれでとてもいいと思います。

先ほど武田総経理からもお話がありましたように、日系企業で人材を採るときに、必ずしも日本語力を優先するということではないようですけれども、それでも皆さんの未来は明るいといえます。明るい未来に向かって是非頑張ってください。

４点ほど話したいと思います。皆さん、今回ここにいらっしゃるパネリストの方をもう一度、見直してください。朴先生は、実際に大学で活躍しておられる方です。張先生は、元外交の第一線で活躍しておられた大先輩で、今ビジネスの仕事をなさっているのですけれども、日本文化、日本文学をよく理解してこられた方だと思います。池崎さんは、このパネリストの中で唯一のネイティブです。これもＳＧＲＡフォーラムを北京で行った価値のあるところだと思います。武田さんは、先ほど自己紹介にありましたように、台湾出身ということで日本語は専門ではなかったのですけれども、ここまで大物になれるという希望も皆さんに与えたと思います。徐さんは、私の１年先輩ですが、日本でビジネスを始めて日本で成功している人だと私は見ています。

こういう方々が、日本語ということをきっかけに、様々な分野で活躍していらっしゃいます。先ほどのビジネス日本語など、いろいろな修飾語が付きますが、多分、私たちや第一線で教えている教員たちのいう「生きた日本語」を学びなさいということです。この「生きた」という言葉にいろいろな意味が含まれていると思います。日本の企業文化、日本の社会、日本の政治文化、そして伝統文化というものを含めた上での「生きた日本語」を、是非学んでいかなければいけないと思います。もちろん皆さんは日本語専門ですので、それを目指さなければいけないところですけれども、その前提として、中国人として美しい中国語、母国語を磨かなければいけないということです。

ここの４人の方は日本語学習者として我々より少し早くスタートしたわけですけれども、皆さん、日本語をやっているので日本人になりきろうというような時期はあったと思います。でも、実際に働いているうちに、１つのアイデンティティの回帰があったと思います。結局、自分は中国人です。中国人として、その武器を磨かなければいけません。中国文化が詰まっている人間ですから。

それから、何回も言っているのですが、実際に教育現場の第一線でやっている人間として、いろいろな角度から、もう一回日本のことを勉強し直さなければいけないと思います。ここには日本語の先生をやっている方は少ないと思いますけれども、その先生たちにいろいろな形を使ってもっと勉強しなさいというメッセージを是非伝えてください。私も含めてです。特に今はインターネットの時代ですので、いろいろな方法で、仕事をしながら自分をさらに磨くということは考えられます。日本語教員として目指さなければいけないことだと思います。そのためには、例えば企業の方に実際に大学に来ていただいて企業文化の話、あるいは外交の政治分野で活躍している方に実際に大学に来ていただいてそういう話をしていただくのも、とても有意義ではないかと思います。

今回のこのフォーラムが北京大で実現できたのはＳＧＲＡ、渥美財団のおかげです。これを機会に１回だけで終わることなく、２回目、３回目が続くように私も祈っています。そのときは皆さんも日本語がかなり上手になっていると思いますので、またお会いしましょう。

挨拶

閉会挨拶

嶋津　忠廣

ＳＧＲＡ運営委員長

皆さん、非常に長時間お疲れさまでした。予定の時間を超える熱心な質疑応答だったのではないかと思います。私はＳＧＲＡの運営委員長を務めております嶋津と申します。閉会に当たり一言御礼を申し上げます。冒頭に今西代表からも申し上げましたけれども、このたび北京大学日本言語文学科の皆さんが60周年記念事業の特別企画に組み入れてくださったおかげで、ＳＧＲＡフォーラムがこのような素晴らしい会場で開催できましたことを大変うれしく思っております。厚く御礼を申し上げます。

そして、非常に多くの方々に参加していただきました。パネラーの話を聞いて、皆さんすごく熱心にメモもお取りになって、２時間の真剣な質疑応答が行われ、大変有意義なフォーラムであったのではないかと、いささか自画自賛ですけれども、大変うれしく思っております。日本語をやっておられてまだ１～２年ぐらいの方も多いようですけれども、皆さん日本語がすごくお上手なのに感心いたしました。

パネルディスカッションのパネラーを務めてくださった皆さん、非常に具体的に、分かりやすく、また楽しく、アドバイスを含めて、中には大変厳しい話もあったようにも思いますけれども、会を盛り上げてくださいまして、本当にありがとうございました。厚く御礼を申し上げます。

また、学内の国際シンポジウム大会そのものの仕事もあって大変忙しかった中で、このフォーラムを準備してくださり、本日を仕切ってくださいました孫先生と朴先生のご尽力に心から感謝申し上げます。ますますご活躍くださいますようにお祈りいたします。

私どもＳＧＲＡでは、相互理解と対話という交流を非常に大切にしております。先程来、総合司会の孫さんからも講師の池崎さんからも、来年もこのような機会をずっと続けたいというお話がありました。私たちとしても、１～２年といわず、是非毎年できたらいいなと期待しております。そのときには、またお会いできることを楽しみにしております。

最後に、北京大学の繁栄と、今日参加してくださった皆さんが日本や母国や、さらには世界のあちこちで活躍されることを祈念いたしまして、閉会とさせていただきたます。今日はどうもありがとうございました（拍手）。

パネリスト・司会者略歴

■ 池崎美代子　(Ikezaki Miyoko ☆ いけざき・みよこ)

学習院大学文学部国文学科卒。1975 年、駐日ポルトガル大使館にて書道・日本語教授をはじめ、その後外国籍ビジネスパーソンに対する日本語教育に関わる。1991 年将来的に公益法人化を目指すベンチャーとしてビジネス日本語協会 [ＢＮＡ] を設立。ビジネス日本語分野から、国際競争力強化のための人材育成策の必要を訴えている。現在会長。BNA と並行して、世界で日本語を学ぶ子どもたちのためのジャパン・リターン・プログラム (JRP) 活動を提唱、数年の活動の後、1995 年ＪＲＰ実行委員会を設立。2004 年 10 年間の実績をもとに「特定非営利活動法人ジャパン・リターン・プログラム（JRP)」とし、世界の日本語学習者に“若いときからの日本のファン” 育成とネットワーク構築、日本語のできる高度専門人材育成とネットワーク構築を目的に、日本語サミットへの招聘事業などの活動を行っている。主な著作に『英文ビジネスレターハンドブック』 ジャパンタイムズ社刊　２０００年６月初版※韓国時事英語社よりにて翻訳版発刊、『ACTFL ― OPI 入門』アルク社刊 2001 年（共著)。

■ 武田春仁　(Takeda Haruhito ☆ たけだ・はるひと)

成蹊大学工学部経営工学科卒、同大学大学院工学研究科情報処理修士課程終了。1979 年富士通株式会社入社。1999 年より富士通（中国）有限公司副董事長（兼）総経理。2006 年富士通株式会社常務理事 (兼) 中国副総支配人 (兼) 中国総支配人室長。

■ 張　潤北　(Zhang Runbei ☆ ちょう・じゅんぼく)

1982 年 北京外国語大学日本語学部卒業。1985 年 東京大学大学院政治学科法学修士号を取得。中国外務省アジア局日本課首席事務官。1992 年中国日本駐在大使館政治部部長代行　一等書記官。中国駐大阪総領事館政治文化部部長。中国駐札幌総領事館首席領事。NEC SI 管理本部本部長代行、NEC 中国顧問。三井化学北京事務所所長代行。

■ 徐 向東　(Xu Xiangdong ☆ じょ・こうとう)

中国大連生まれ。北京外国大学、北京日本学研究センター（修士課程)、北京外国語大学専任講師などを経て、1996 年に立教大学博士課程に留学し、博士（社会学）学位取得。日本労働研究機構情報研究員、中央大学兼任講師、日経リサーチ主任研究員を経て、現在キャストコンサルティング代表取締役社長。専修大学兼任講師。ＳＧＲＡ「人的資源と技術移転」研究チームチーフ。日経リサーチ時代から、中国での市場調査やマーケティング戦略のコンサルティングに従事。近著に「中国で『売れる会社』は世界で売れる！日本企業はなぜ中国で勝てないのか」（徳間書店、2006 年 8 月)。

■ 朴 貞姫 （Piao Zhenji ☆パク・チョンヒ）

中国吉林省生まれ。1980 年中国延辺師範大学日本語学科卒。1987 年延辺大学中国語学科卒。その後、中国延辺教育出版社外国語編集室の室長、日本語教材編纂委員会主任編集員等を経て、1998 年日本留学。2001 年、明海大学大学院から応用言語学修士号を取得。2004 年応用言語学博士号を取得。代表的な編著書に、『最新日朝辞典』(1991、延辺教育出版社)、『義務教育中学校日本語』1-8 巻（1993 － 1998、延辺教育出版社）、『義務教育中学校日本語―教師マニュアル』1-8 巻（1993 － 1998、延辺教育出版社）、『日朝中空間概念の研究』（2004、博士学位請求論文、明海大学）、『日朝中 3 言語の仕組みー空間概念表現の対照』など 20 数冊。現在、中国北京語言大学外国語学院日本語学科長、助教授。日本早稲田大学日本語研究教育センター訪問学者、財団法人日本教科書研究センター特別研究員を兼任。ＳＧＲＡ研究員。

■ 孫 建軍 （Sun Jianjun ☆そん・けんぐん）

中国江蘇省生まれ。北京国際関係学院、北京日本学研究センター（修士課程）、北京語言大学専任講師を経て、1997 年に国際基督教大学博士課程に留学し博士学位取得。国際基督教大学、埼玉県立大学、朝日カルチャー兼任講師、国際日本文化研究センター COE 研究員を経て、現在北京大学日本言語文化学部助教授。主要論文：「日本語彙の近代」（国際基督教大学提出博士論文、2003 年）、「西洋人宣教師の作った新語と造語の限界」（『日本研究』第 30 集、2005 年）、『日本語教育学事典』（共著、おうふう社）。ＳＧＲＡ「人的資源と技術移転」研究チームメンバー。

あとがき

朴　貞姫

（北京語言大学助教授、ＳＧＲＡ研究員）

去る２００６年１０月２１日（土）、北京大学生命科学学院報告庁にて、「北京大学日本言語文学科設立６０周年記念シンポジウム特別企画」として、ＳＧＲＡフォーラム in 北京『若者の未来と日本語』が盛大な雰囲気の中で開催されました。

中国で初めてのＳＧＲＡフォーラムでしたが、参加者は予想外に１００名を超え、会場を熱気で包んでくれました。テーマが『若者の未来と日本語』だけあって、参加者のほとんどは、北京大学、北京語言大学、北京外国語大学など、北京市内の大学から来た学生でしたが、中でも北京語言大学の学部生がもっとも多かったのです。これは、多分本フォーラムが実用日本語を中心に翻訳通訳者の養成に力を入れている北京語言大学の学生のニーズに合ったからではないかと思われます。

フォーラムは、午後２時から５時までの予定でしたが、４人のパネリストの熱気に溢れるスピーチの後、フロアーの参加者との真摯なディスカッションが続き、時の経つのも忘れ、５時５０分になってやっと惜しい気持ちで閉会を告げました。

総合司会の孫建軍先生（北京大学日本言語文化学部助教授、ＳＧＲＡ研究員）の開会の言葉がよいスタートとなり、引き続き、開会の挨拶として、今西淳子代表（ＳＧＲＡ代表、渥美国際交流奨学財団常務理事）が、素晴らしいデザインのパワーポイントでＳＧＲＡを紹介して、参加者の人気を集めました。その好調子に乗って、パネリストが登壇し、自己紹介の後、パネルディスカッションのための主題講演が、池崎美代子先生（ＪＲＰ専務理事、ＳＧＲＡ会員）の「ビジネス日本語とは」から始まり、続いて武田 仁先生（富士通（中国）有限公司副董事長（兼）総経理）の「グローバル企業が求める人材」、張潤北先生（三井化学北京事務所所長代理）の「日本文化と通訳の仕事」、徐向東先生（キャストコンサルティング代表取締役、ＳＧＲＡ研究チーフ）の「『日本語』の壁を超える」といった順で行われました。最後にＳＧＲＡ運営委員長の嶋津忠廣氏がフォーラムをまとめ、閉会の辞を述べました。

パネリストの主題講演には、それぞれ特徴があって、それに対するコメントとともに、フォーラムに異彩を放ってくれました。というのも、フォーラムのテーマ自体が「若者の未来」と「日本語」という２つの意味を含んでおり、パネリストの主張も主に「ビジネスマナー」としての「美しい日本語」と、「ビジネスセンス」として『日本語』の壁を越えた「中身のある言葉」の２つが議論のテーマになっていました。池崎先生と張先生の講演では、「美しい日本語」、「文化としての日本語」とつながるものが多く覗われ、武田先生と徐先生の講演では、「若者の未来」を提示した「企業が求める人材」についての内容が多く覗われたのです。

池崎先生は「ビジネス日本語」の特徴として「美しい日本語」を強調し、「ビジネスセンス」と「日本語能力」

を外国人高度専門人材像の備えるべき大切な資質として挙げました。一方、武田先生は「企業の求める人材」像について「人格（職員の魂）、センス（マナー）、能力（目標評価）、個性（自分だけのもの）」といった総合的立場から概括し、それに続いて徐先生が「ビジネスキャリア、知識（母語のレベルも含めて）、創造性（チャレンジ精神）」を「企業の求める人材」像の条件として付け加えました。張先生は、文化的要素の重要性について生き生きとした翻訳の例を挙げて興味深く説明し、また、コミュニケーションにおける「文化」的要素を「企業の求める人材」の条件の１つとして強調しました。

閉会後、参加者に「どうでしたか」と聞いたら、「とても勉強になりました」「励まされました」「日本語の勉強の目標を見つけました」「日系企業や日本社会の求める人材像が分かりました」などなど、評判の声が多かったです。

残念なのは、参加者の中に北京大学と北京語言大学以外の学生が少なかったことです。もっと多くの大学に声をかけて、日本語を無難に駆使できる大学高学年生や大学院生に来てもらえたらもっとよかったのに･･･。

本フォーラムは、急増している中国での日本語学習者のニーズに合わせて、日本語学習者を対象に、日本語教育の現状や日系企業を含む社会のニーズや先輩の経験談を紹介し、日本語を学ぶことによって広がる未来へのビジョンを提供することで、若者の期待に応えるためにはどのような教育が必要とされているか提案することを目標として開催されましたが、予想どおりの成果を上げたと思います。なお、今回のように、ＳＧＲＡフォーラムを世界中に広げていくことは、われわれのこれからの仕事ではないかとも思います。

ＳＧＲＡレポート
バックナンバーのご案内

SGRAレポート01　設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」
船橋洋一　2001.1.30 発行

SGRAレポート02　CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高偉俊、F. マキト、金雄熙、李來賛　2001.1.15 発行

SGRAレポート03　渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」
畑村洋太郎　2001.3.15 発行

SGRAレポート04　第1回フォーラム講演録 「地球市民への皆さんへ」
関啓子、L.ビッヒラー、高熙卓　2001.5.10 発行

SGRAレポート05　第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」
平川均、F. マキト、李鋼哲　2001.5.10 発行

SGRAレポート06　投稿 「今日の留学」「はじめの一歩」
工藤正司　今西淳子　2001.8.30 発行

SGRAレポート07　第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. バート、高偉俊　2001.10.10 発行

SGRAレポート08　第4回フォーラム講演録 「IT 教育革命：IT は教育をどう変えるか」
臼井建彦、西野篤夫、V.コストブ、F.マキト、J.スリスマンティオ、蒋恵玲、楊接期、李來賛、斎藤信男　2002.1.20 発行

SGRAレポート09　第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」
ペマ・ギャルポ、林泉忠　2002.2.28 発行

SGRAレポート10　第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三　2002.6.15 発行

SGRAレポート11　投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」
金香海　2002.7.8 発行

SGRAレポート12　第7回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. ブレンサイン　2002.10.25 発行

SGRAレポート13　投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」
F. マキト　2002.12.12 発行

SGRAレポート14　第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」＋宮澤喜元総理大臣をお迎えしてフリーディスカッション
平川均、李鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟健軍、B. ヴィリエガス　日本語版 2003.1.31 発行、韓国語版 2003.3.31 発行、中国語版 2003.5.30 発行、英語版 2003.3.6 発行

SGRAレポート15　投稿 「中国における行政訴訟―請求と処理状況に対する考察―」
呉東鎬　2003.1.31 発行

SGRAレポート16　第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」
苑復傑、遊間和子　2003.5.30 発行

SGRAレポート17　第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石隆、南基正、李恩民、村田晃嗣　日本語版 2003.3.30 発行、英語版 2003.6.6 発行

SGRAレポート18　第11回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」
高橋甫、貫戸朋子　2003.8.30 発行

SGRAレポート19　投稿 「海軍の誕生と近代日本－幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」
朴栄濬　2003.12.4 発行

SGRAレポート20　第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：COP3の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊　2004.3.10 発行

SGRAレポート21　日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」
2004.6.30 発行
SGRAレポート22　渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争－どうして起こるのか　どう解決するか」
明石康　2004.4.20 発行
SGRAレポート23　第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ　2004.2.25　発行
SGRAレポート24　投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助:その評価の歴史」
フスレ　2004.10.25 発行
SGRAレポート25　第14回フォーラム講演録「国境を越える E-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F.マキト、金雄熙　2005.3.31 発行
SGRAレポート26　第15回フォーラム講演録「この夏、東京の電気は大丈夫？」
中上英俊、高偉俊　2005.1.24 発行
SGRAレポート27　第16回フォーラム講演録「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R.エルドリッヂ、朴栄濬、渡辺剛、伊藤裕子　2005.7.30 発行
SGRAレポート28　第17回フォーラム講演録「日本は外国人をどう受け入れるべきか-地球市民の義務教育-」
宮島喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴校熙、小林宏美　2005.7.30 発行
SGRAレポート29　第18回フォーラム・第 4 回日韓アジア未来フォーラム講演録「韓流・日流:東アジア地域協力におけるソフトパワー」
李鎮奎、林夏生、金智龍、道上尚史、木宮正史、李元徳、金雄熙　2005.5.20 発行
SGRAレポート30　第19回フォーラム講演録 「東アジア文化再考－自由と市民社会をキーワードに－」
宮崎法子、東島誠　2005.12.20 発行
SGRAレポート31　第20回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合:雁はまだ飛んでいるか」
平川均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範建亭、白寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F.マキト
2006.2.20 発行
SGRAレポート32　第21回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか－留学生－」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、角田英一　2006.4.10 発行
SGRAレポート33　第22回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」
小菅信子、李恩民　2006.7.10 発行
SGRAレポート34　第23回フォーラム講演録 「日本人と宗教:宗教って何なの？」
嶋薗進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ、ミラ・ゾンターク、セリム・ユジェル・ギュレチ　2006.11.10 発行
SGRAレポート35　第24回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」
鈴木進一、間宮尚、李海峰、中西徹、外岡豊　2007.3.20 発行
SGRAレポート36　第25回フォーラム講演録 「IT は教育を強化できるか」
高橋冨士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇　2007. 4. 20 発行
SGRAレポート37　第1回SGRAフォーラム in 北京 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張潤北、徐向東、孫建軍、朴貞姫　2007.6.10 発行

☆　レポートご希望の方は、SGRA 事務局（Tel:03-3943-7612　Email:sgra-office@aisf.or.jp）へご連絡ください。

☆ 「SGRAかわらばん」無料購読のお誘い

「SGRAかわらばん」は、SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週2回（火・金）、電子メールで発送いたします。どなたにも無料で購読していただけます。下記より登録してください。
http://www.aisf.or.jp/sgra/sgrakawaraban.htm
ご登録いただいた方は、SGRAメール会員となり、「会員用」ホームページから、SGRAレポートのバックナンバーをダウンロードしていただくことができます。

ＳＧＲＡレポート　No.0037

ＳＧＲＡフォーラム in 北京

「若者の未来と日本語」

編集・発行　関口グローバル研究会（SGRA）
〒112-0014　東京都文京区関口 3-5-8（財）渥美国際交流奨学財団内

Tel：03-3943-7612　Fax：03-3943-1512

SGRA ホームページ：http://www.aisf.or.jp/sgra/

電子メール：sgra-office@aisf.or.jp

発行日：2007 年 6 月 10 日

発行責任者：今西淳子

印刷：藤印刷

ⓒ 関口グローバル研究会　禁無断転載　本誌記事のお尋ね並びに引用の場合はご連絡ください。